

肥前陶磁器産業における製造・ 流通システムの形成

—商人を中心とした地場産業の継続と発展—

石川 和 男*

はじめに

わが国には、中世・近世の時代から長く継続してきた産業が各地に残っている。本稿で取り上げる肥前陶磁器もその1つである。他方、多くの産業が生まれたものの、時間経過に耐えられず、廃れた産業や産地も多い。それでは現在も継続している産業と廃れてしまった産業の違いはどこにあるのだろうか。その違いはさまざまな局面で見出すことができるだろう。経営資源など産業自体の内部要因によるもの、市場変化や技術革新など外部要因によるものなど、それぞれに理由があろう。

本稿で取り上げた肥前陶磁器産業は、近世初期に興り、現在まで400年以上の時間経過に耐えてきた。ここでは製造システムと流通システムが、車の両輪のようにかみ合い、当該産業内部で次々に起った課題を克服し、さらに外部で起った課題も同様に克服しながら現在に至っている。その過程で商人が遂行してきた役割は、時代、時期を問わず、計り知れないものがあつた。つまり商人は、流通システムの形成ではもちろんのこと、製造システムでもさまざまな関わりを持ち、今日の肥前陶磁器をつくりあげている。

そこで本稿では、肥前陶磁器産業において、商人がいかに肥前の地場産業である陶磁器産業を育成し、継

続させてきたかについて考察する。それとともにその影響力の大きさについて、産地内外で起ったさまざまな事象から、現代における商人機能（流通機能）について観察していきたい。

1 肥前陶磁器産業の黎明

(1) 肥前の成立

肥前と呼ばれたのは、現在の佐賀県と対馬と壱岐を除いた長崎県に跨がる地域であった。肥州とも呼ばれた。近世幕藩制度下では、外様大名の佐賀（鍋島・肥前）藩、親藩大名の唐津藩、津島藩の飛び地である鳥栖・田地域などが現在の佐賀県である。また外様大名の松浦藩と大村藩、天領である長崎などが現在の長崎県である。佐賀藩は支藩制度によって、小城・鹿島・蓮池など各支藩に分割して統治していた。肥前陶磁器（焼き物）については、唐津藩に唐津焼、松浦藩に平戸焼・三川内焼、大村藩に波佐見焼、鍋島藩に有田焼・伊万里焼・鍋島藩窯があり、どの藩でも陶磁器を製造していた（大矢野（1994）22）。したがって、肥前は陶磁器製造の盛んな地域であり、現在も地場産業としての窯業が継続している。

陶磁器の多くは、その産地名で「〇〇焼」と称されるが、瀬戸物や唐津物は、各時期の積出港名がブランド名となった¹⁾。このように陶磁器は、産地名がブランド名となることが多い。しかし、伊万里焼（古伊万

* 専修大学商学部教授

里)²⁾については、近世において主に有田で製造された磁器（有田焼）の積出港が伊万里津（港）であったため、積出港の名称で呼ばれるようになった。他方、現在の愛知県瀬戸市を中心に製造されてきた瀬戸焼（物）は、東日本各地の太平洋側に面した名古屋から船便の利便性が高い地域で使用された。そのため、この地方では陶磁器を瀬戸物と呼んでいる。また日本海側では、陶磁器は唐津や伊万里港から送られてきたため、「唐津」や「唐津物」と呼ばれることが多い³⁾。このように地方によって製品（商品）呼称が異なっているのは、流通起点やそのチャンネルが異なったためである（大矢野（1994）25）。これは陶磁器だけでなく、わが国で伝統産業といわれる産業において製造（生産）された製品については、現在も連綿と受け継がれている塗物や繊維関連品などでも同様の傾向がみられる。

(2) 陶器と磁器

1) 陶磁器原料の調達と商人

焼き物は、陶磁器とまとめて呼ばれることもあるが、陶器と磁器はその原材料や製造工程が異なっている。陶器の原料は陶土である。陶器は、狭義には素地が十分に焼き締まらずに吸水性があり、不透明でその上に光沢のある釉薬をかけた焼き物である。広義には、素地が焼き締まり、吸水性がなく、不透明な炆器を含んだものである。唐津焼がその代表である。一方、磁器の原料は陶石である。吸水性がなく、素地が白色で半透明の硬い焼き物である。磁器の原料である陶石は、有田町泉山が産地として知られる。有田焼や伊万里焼がその代表とされる（伊万里市陶器商家資料館（2020a））。

したがって、陶器と磁器は、原材料だけではなく、その製造工程も異なっている。特に後者は、その原材料調達、さらにその品質は製品としての磁器にも影響している。陶器の原材料調達は、窯（焼）と呼ばれる製造業者の手によっても調達可能であったが、磁器の原材料である陶石の調達は、窯焼が継続的に行うには多くの困難があった。そこで原材料を採掘している事業者から陶石を仕入れ、それを窯焼に対して継続的に供給していた卸売商人の存在がクローズアップされる

ことになる。

2) 磁器製造工程の分業化

このように肥前陶磁器の製造システムは、磁器原料を基盤とした。それは陶器の原料は比較的、広範囲で入手することができたが、磁器は原料産地が限定され、その存在や確保が産地形成に影響したからである。また陶磁器産業では、早くに分業システムが確立し、流通システムと密接に関係していた。特に肥前陶磁器の市場は、海外だけでなく、国内でも中心市場から遠隔地であり、産地と消費地を架橋していた流通の役割が大きかった。他方で陶磁器の原材料だけでなく、陶磁器製造には燃料確保が重要であった。そのため窯場（陶磁器を焼く窯のある作業場）は、1630年代に原料産地を中心に成立し、1650年代には製造工程を完結させるシステムが構築された（野上（2017）567-568）。つまり、原料産地が陶磁器産業の起点となっている。

陶磁器は、原料が近隣に存在した地域でもその品質と生産量は異なっている。それが窯場の性格を規定したとされる。有田と距離的には近い波佐見⁴⁾における製品の違いもそれによる。また使用原料によって製造技術も異なると当然製品も異なることになる。そこで肥前磁器は、原料を最重視し、安定的な供給システムを指向することとなった。そのため窯場の立地条件は、地理的条件よりも原材料の安定供給が優先された。17世紀中頃から後半にかけて行われた有田内山における窯場再編成は、製造システムの確立が前提であった。さらに原料管理によって、陶磁器製造地域の管理が可能となった。有田では、泉山陶石の一元的管理が陶磁器製造地域を管理することに結びついた。そのため、泉山陶石は流通圏外での使用が制限された（野上（2017）568）。こうした原材料の流通範囲を中心に形成された製造システムは、窯場を中心に形成されたというよりも、原材料の供給チャンネルにおいて、チャンネルリーダーともいえる卸売商人の力が大きく影響したと推測される。

3) 商人による流行の決定づけ

初期の伊万里焼は、中国磁器をモデルに朝鮮半島から伝達された技法により製造された。当初は中国製品の市場における流通量の減少を補完するために製造さ

れ始めた。しかし、製造技術の向上と中国風磁胎の追求により、1660年前後には姿を消すこととなった。初期の伊万里焼の器胎は、唐津焼（陶器）から発展したため、中国磁器とは共通性があった。また景德鎮民窯から輸入された古染付の器形による影響も指摘されている。釉薬は微量に含まれた鉄分が発色し、青みを帯びている。絵柄は、景德鎮民窯から輸入された古染付絵柄であり、近世中後期の古伊万里様式に比べると洗練されておらず、その素朴な画調が「侘び」「寂び」に通じている（外山（2012）27）。つまり、初期の伊万里焼は中国磁器とは似て非なるものであったようだ。ただ市場が中国磁器と初期の伊万里焼の相違をどこまで理解して、受容したのかについては詳らかではない。

他方、古九谷様式⁵⁾は1640年代に発生した初期の色絵磁器である。17世紀に石川県倉荷で製造されていたというが、大部分は有田で焼かれた色絵磁器であった⁶⁾。これは柿右衛門様式・鍋島様式への傾倒により姿を消した。素地は、鈍い灰色で発色の悪い素地が目立たないように覆い隠す絵柄が施されたという説もある。絵柄には「五彩」「青手」の2類型がある。五彩は白の地色に緑、黄、青、赤、紫の彩色で中国風の絵柄、青手は器の地色に緑色の植物文等の使用が目立っている。着物柄、障壁画との共通性がある（外山（2012）27-28）。古九谷様式は、柿右衛門様式・鍋島様式に対する産地の製造傾向により、その継続が確認できなくなった。これは陶磁器以外についても、産地において特定の傾向（方向性）が明確になると、それを取り扱う商人も特定の様式を好んで取り扱うようになる。その結果、ある様式についての盛衰が観察できる。したがって、商品を取り扱った商人（産地卸）がその様式の盛衰を決定づけることもある。それは製（商）品の良否ではなく、商人が多くを取り扱った商品が市場に受容され、主流となる。そのため、商人が商品の盛衰を決定する側面があった。

4) 分業による磁器産地の形成

寛永14（1637）年に行われた窯場の整理統合は、有田皿山の磁器製造において専業化過程を推進する契機となり、当該地域での最初の製造工程分業となった。つまり佐賀藩では、磁器と陶器についての地域的分業

であった。のちに上絵付業の分業も起ったが、政治的理由で分業化されると特定業者の独占や寡占を生むことになった。またそれによって生じた既得権保守が、分業をより進捗させた。幕末の赤絵屋増加（有田町史編纂委員会（1985）535）に対する赤絵屋側の抵抗は既得権保守のためであった。さらに産業の継続には、分業の社会的確立が重要であった。そして技術的分業は技術保持や継承に有効であった。地域的分業は需要変化により、構成される窯場が一部欠けた場合も相互に補完し、全体として継続した（野上（2017）570-571）。この状況から、磁器製造では製造工程が多段階に分かれており、各工程を特定の人や小規模組織で行うには困難があったようだ。そのため、地域では各製造工程の専門担当者や組織が形成され、全体として生産性が向上した。ただ専門化し過ぎると、蝸壺的になる危険性もあった。それは製造工程の一角を占める担当者に何らかの事故が起こり、当該部分の製造工程が担当できなくなると、製造を継続できなくなるためである。

(3) 朝鮮人陶工

1) 朝鮮人陶工からの技術伝達

肥前においては、磁器製造でどのような製造技術が導入・発展したことで産業として確立したのだろうか。わが国で地場産業と呼ばれる産業における製品は、当該地域で自然にその技術が発生、発展していったもの、別の国や地域から技術が伝達され、継承、発展していったものに分けられる。さらに近年では、ある地域から特定産業に必要な経営資源がそのまま移転し、形成された企業城下町のようなかたちのももある。肥前は、わが国本土西端に位置し、古くから大陸との交流が盛んな地域であった。そのため肥前陶磁器の製造技術は、16世紀末に豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に伴って伝達されたとされる。

中国磁器は品質に優れ、15世紀終わりには貿易品として世界で流通していた。わが国では、磁器は中世までは製造できず、主に中国から輸入していた。他方、中国での磁器製造は、16世紀には青磁に代わり、染付中心へと変化した。肥前陶器の製造技術は、豊臣秀吉の朝鮮出兵が契機とされる。その背景には、秀吉が一

時期千利休を取り立てていたことから、茶の湯が武将や豪商間で流行し、高麗茶碗など朝鮮陶器への評価が高まっていたことがあった。そこで肥前松浦党の豪族波多氏が、秀吉の朝鮮出兵の際に朝鮮陶工を連れ帰り、城下において陶器を製造させた。北部九州の諸侯も同様に、文禄慶長の役の終わりにはやはり朝鮮半島から多くの陶工を連れ帰り、諸藩での陶器焼成が始まった。他藩の状況から類推すると、唐津藩でも朝鮮人陶工により「お庭窯」、のちに「藩窯」と呼ばれる御用窯が形成された。今日いわゆる松浦系古唐津の諸窯と呼ばれる東西松浦郡内に分布する古窯跡は、この状況下で営まれた（伊万里市史編さん委員会編（2007）552）。

朝鮮陶工を連れ帰った波多氏は、秀吉の逆鱗に触れ、文禄3（1594）年に取り潰されると、保護者を失った陶工らは離散した。これにより伊万里や武雄へも窯場が拡大した。慶長の役後には、多くの朝鮮陶工が製造した「唐津」の生産量が急増し、広く全国に流通した。これにより肥前がわが国の陶器製造の中心となった（大橋（2011）6）。波多氏の没落によって、家臣は各々東西松浦郡内の本貫地に下野し、領主の庇護を失った岸岳五窯の陶工も分散した。現在、伊万里市内に約50ヵ所残る高麗窯（古唐津焼）跡は、その多くが慶長期に築窯されたものである。このうち松浦町藤ノ川内の窯は、鍋島藩の御用窯、南波多町椎の峯の諸窯は唐津藩の御用窯であった⁷⁾。重要文化財級の古唐津焼の多くは、これらの古窯で製造され、現在もその伝統を受け継いでいる（古賀153）。

2) 李参平による有田焼の創始

鍋島直茂に連れられて来日した朝鮮陶工は、有田泉山・西有田竜門・伊万里大川内山で磁石礦を発見した。そして、元和元（1615）年頃、わが国ではじめての磁器が製造された（伊万里歳事記、古賀153-154）。有田焼の陶祖とされる李参平（金ヶ江三兵衛）は、豊臣秀吉が出兵の際、鍋島軍が連れ帰った陶工の1人であった（野上（2018）425）。そのため有田焼は、李参平が1616年に有田泉山で白磁鉍を発見し、天狗谷窯で白磁器を焼いたことが原点である。そこで有田焼の創業は、李の有田移住時期である元和2（1616）年とされた（外山（2012）27）。こうして有田焼は、李を陶

祖として製造が始まったが、先にもふれたように有田で製造された磁器は、その積出港が伊万里津であったため、「伊万里（焼）」と呼ばれるようになった。

近世に肥前で製造された磁器は、伊万里港から積み出され、国内だけでなく、遠くヨーロッパまで輸送された。そのために積出港であった伊万里が磁器の代名詞となった。（伊万里市観光協会他、6）。他方、近代以降、伊万里市大川内町などで焼かれる近現代の「伊万里（焼）」と区別するため、近世の伊万里焼を「古伊万里（焼）」と呼ぶのが一般的である。これは1610年代頃から製造され始めたわが国初の磁器であり、有田中心の民窯で年間数十万個から数百万個が製造された（伊万里市教育委員会（2002）38）。近代以降、磁器は産地名で呼ばれ、有田で焼かれると有田焼、伊万里市で焼かれると伊万里焼と呼ばれている（黒田・大森・副島（2008）114）。このような違いがあるため、近世の伊万里焼と近代の伊万里焼は明確に区別されなければならない。

(4) 肥前磁器形成期の動き

1) 商人が媒介した技術伝承

唐津藩二代藩主寺沢堅高は、天草一揆（1637～1638年）の不始末により、天草領4万石を召し上げられた。その死去によって寺沢家が断絶したため、唐津領は1年間幕府直轄となり、水谷伊勢守が預かった。このとき、江戸から伊勢守に梅村和兵衛が随伴した。その後、唐津藩主が大久保忠職に代わった。しかし、和兵衛は江戸に戻らず、大久保加賀守忠朝に取り立てられて御用焼物師となり、相知町平山櫨の谷に窯を開き、主に陶彫を得意とした。轆轤細工は、三川内から轆轤職人を呼び藩の御用品を製作した。和兵衛は、中里家三代甚右衛門（1704年没）が開窯した窯先に窯を継ぎ足し、藩の御用品を製造した。また和兵衛は徒士待遇を得て、年間100日ほどを川原で勤めた。その作風は古唐津とは異なるものであった。釉薬は薄いクリーム色で高台内まで釉薬がかけられ胎土も精良であり、のちの土灰釉製品の先駆けとなった（伊万里市史編さん委員会編（2007）554-555）。

寛永年間（1624～1643年）には、既に伊万里商人の東嶋徳左衛門や岩永伝右衛門らが陶磁器を取引してい

た。彼らが扱った陶磁器は、富村源兵衛らによって東シナ海を越え、インド方面にまで私貿易されていた（伊万里市陶器商家資料館（2020b））。1640年代には中国（清）から色絵技法が有田に伝えられた。その技法は、東嶋が1644年に長崎へ来航した清の技術者から陶磁器への彩画着色法を学び、それを有田の初代柿右衛門（酒井田喜三右衛門）⁸⁾に伝えた。柿右衛門家の古文書『赤あかえの絵之具ぐ覚おぼえ』には、初代柿右衛門がこの頃ごす（呉須）権兵衛らの協力により、赤絵付に成功した記録がある（山田（2013）224）。これにより、初代柿右衛門への技法伝達には商人が関わっていたことが明確である。

前段であげた有田焼の白磁上で鮮やかな藍色となる絵の具が呉須⁹⁾である。呉須は中国産の天然鉱物で非常に高価であった。それは当時同じ重さの金と同等あるいはそれ以上の価値があったともいわれている。呉須による藍色絵の具以外の赤色・黄色・緑色などの絵具は、すべて「赤絵」と呼ばれる（大矢野（1994）29-30）。

2) 商人による製造継続支援

赤絵に代表される柿右衛門様式は、わが国の第二次世界大戦前の教科書の中で初代柿右衛門の赤絵開発の苦心譚が紹介され、「柿右衛門」の知名度が全国的に上昇した。これはヨーロッパにおいてわが国を代表する陶磁器として評価され、ドイツのマイセン（Meissen）¹⁰⁾など各地で模造品が製造された。これは1670年代頃成立し、輸出向けに製造された。素地は透明度の低い乳白色であり、絵柄の構図は余白を多くとり、左右非対称の花鳥・植物文が描かれた。絵付は本焼成後に低温で焼き付ける上絵のみであった。絵具は朱に緑が基調であり、江戸期には青も目立っている¹¹⁾（外山（2012）28）。現在の柿右衛門は、初代から数えて十五代目に当たる。これまで連続とその技術が伝承され継続、発展したことは、肥前地域での技術伝承の秀逸性を示すものである。またそれを支援した環境も忘れてはならない。

つまり、赤絵技術の完成には伊万里商人が深く関与し、さらにわが国でその技術の萌芽を観察できる。そして藍色を発色させるための絵具である呉須を継続的に中国から輸入し、それを肥前の陶工に販売してきた

卸売商人の活動については注目すべきものがある。それは陶工自身は、製造技術が伝えられても製造をするための道具（絵具）がなければ、製造はかなわない。また呉須を陶工自身が輸入するには大きな困難があった。そのためそれを明から輸入し、陶工へ卸売をした商人の存在に対しては非常に大きな位置づけが与えられるだろう。

2 肥前磁器の特徴

(1) 肥前陶磁器製造のための材料供給

1) 原料（陶石）供給のシステム化

肥前磁器の製造システムは、天草陶石の使用で大きく変化した。原料産地の天草地方では原料採掘業、原料荷揚地の塩田川流域において製土業が興った（有田町史編纂委員会（1988）419-420）。佐賀藩は泉山陶石を一元管理し、流通圏外でも産地を同一の製造システムにおさめられたのは、陶石の最上品質が前提であった。しかし、泉山陶石以上の品質を有したとされる天草陶石が大量供給され、泉山陶石の流通圏外、あるいは品質の低い泉山陶石の流通圏で産地形成を変化させた。そして、陶石産地を起点として製造地域が拡大し、製造技術が普及したことで地方窯が出現した。こうした製造機能の変容も原料の供給変化が影響した。天草陶石の使用は、地域的窯業圏では製造工程が完結せず、より広域での製造工程が完結する窯業圏に変化した（野上（2017）568-569）。まさに原材料供給におけるサプライチェーンの変化、さらに製造工程の分化が肥前の磁器製造に大きく影響した。

肥前陶磁器の製造工程は、早くに分業化し、原料採掘が窯場から切り離された。磁器製造の初期段階では各窯場は原料を確保したが、泉山磁石場の発見後には原料採掘が窯場から切り離された。『金ヶ江家文書』には、原料採掘で「伐賃」を手にしていた職種が記載されている。江戸後期には原料粉碎を生業とする「賃替」も出現した。川筋の水碓で粉碎したため、位置的にも窯場から切り離され、製土業は分業化した（野上（2017）570）。こうして製造工程以前の段階でも作業の専門化が起った。

そして、泉山に代わり天草陶石が使用・普及し、近

代以降、広域での製造工程が完結する陶磁器製造地域へと変化した。そのため、製造工程の広域での地域的分業が明確になった。これは天草の原料採掘業、塩田川流域の製土業の成立・発展が観察される。製造工程では、単純作業が必要な分野と熟練度が必要な分野で分業が起こる。単純製造工程は繰り返しが行われるが、複雑で技術水準の高い工程が大きな割合を占めるとその分野が切り離され、分業化される（下平尾（1996）26）。一方、地理的に離れた工程は分業化されやすく、製造工程の分業は、概ね工程順に分業化された。原料採掘の次には原料採石業である江戸後期の「賃替」が生まれ、近代以降、水簸工程を含めた塩田川流域の製土業が成立した。次工程の成形は波佐見で生地業が発達した。こうした一連の製造工程で端部に位置する工程ほど分業しやすい（野上（2017）572）。磁器製造工程は、原料供給過程だけでなく、さまざまな製造工程も分化していったが、そこには空間的な距離が大きく影響したといえる。それは限定されたごく狭い地域での製造ではなく、適度な「懸隔」が磁器地域を形成したともいえる。

(2) 伊万里焼（古伊万里焼）の形成と展開

1) 肥前磁器積出港としての伊万里津

伊万里焼（古伊万里焼）は、近世の肥前で製造された磁器である。その中心地である現在の佐賀県西松浦郡有田町で製造された磁器は、北へ約10km離れた伊万里津（伊万里港）で船積みされ、各地へ輸送された。伊万里焼は、17世紀中頃以降は主に長崎に運ばれ輸出された。そのため、積出港の名が国内での商品名

の通称となった。それはこの地方で古くから製造され、唐津港から船積みされた陶器が「唐津焼¹²⁾」と呼ばれたのと同様である。そして近世後期に他地域の磁器生産が発展するまでの約200年間、伊万里焼は高級磁器として国内では羨望の的となった（坂井（1998）8）。長期間、国内で人気を保ったことは、製造・流通システムが連携していたことが背景にあった。

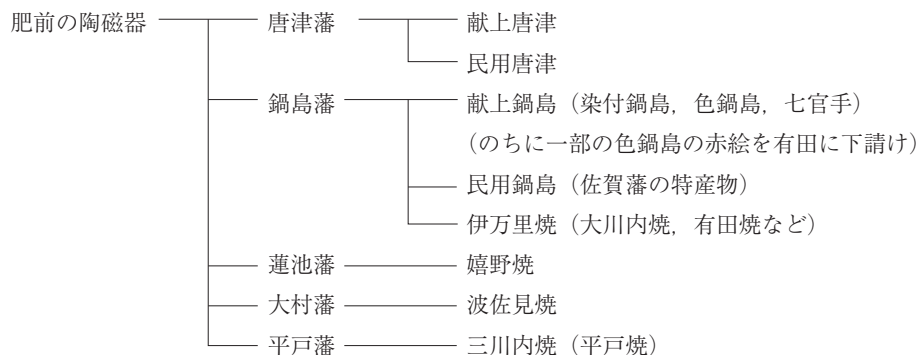
こうして伊万里津は、早くから肥前磁器の主要生産地（有田）の積出港となった。現在の伊万里焼は、伊万里市という行政正域で製造された磁器という意味において、この名称を用いる場合がある。つまり、現在の伊万里焼は肥前磁器の総称ではなく、産地名称となっており、伊万里焼には複数の意味がある（野上（2017）4）。ちなみに産地（窯場・皿山）として伊万里に属したのは、大川内（いわゆる民窯）や市ノ瀬山であり、その大半は有田地方に所在していた（伊万里市歴史民俗資料館（1996）1）。

陶磁器製造では、産地間の陶磁器製品の差異は次第になくなっていった。それは産地間で分業が発達し、町と町の間で製造工程の分業と流れ作業が行われたためである（大矢野（1994）74）。これは肥前地域での陶磁器だけではなく、現在も地場産業として残る製品分野では、同様の傾向を多く見ることができる。図表1は、肥前で陶磁器製造が行われた藩との関係を示している。特に唐津藩と鍋島藩は、複数の陶磁器を有しているが、顧客に対する区別が中心であった。

2) 有田焼ブランドとしての流通

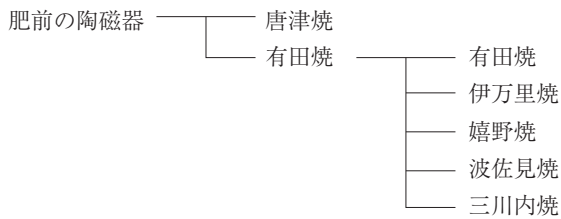
あとで取り上げる大川内の鍋島藩窯は、有田焼の赤絵技術を守るため、献上品の素焼と本焼を行う共同窯

図表1 肥前の陶磁器



(出所) 大矢野（1994）74（一部改）

図表2 有田焼の構成



(出所) 大矢野 (1994) 73 (一部改)

であった。有田焼が市場に受容され、その他周辺地域の陶磁器は「有田焼」ブランドとして、同一の流通チャンネルが利用された。こうして既存の流通チャンネルで市場を獲得する費用の方が、独自に流通チャンネルを構築するよりも低い費用で済んだことがわかる。これにより有田焼は、肥前の代表的磁器として周辺地域の陶磁器を巻き込みながら市場を拡大していった(大矢野 (1994) 47-48)。また図表2からわかるように、現在有田焼と称される陶磁器には、有田焼、伊万里焼、嬉野焼、波佐見焼、三川内焼がある。すべて肥前で製造された陶磁器であるが、現在は近世から現在に至る伝統よりも、現在の地域を地域ブランドとして強調する傾向が観察できる。

3) 製造技術と地域的分業の進展

肥前陶磁器の製造システムや産地発展による分業は、陶磁器産業が社会的に確立した過程である。肥前陶磁器の分業は、1つは各製造工程や製造技術的分業であり、各製造工程や製造技術を専門化し、生産効率を向上させた。技術的分業は「有田皿山職人尽絵図大皿」に描かれた窯場内の年齢、性別など役割分担的分業もあれば、赤絵屋のように業種として窯焼から独立した分業もある。もう1つは窯や窯場あるいは産地間での製品づくり分けによる地域的分業であり、陶磁器産地を構成する窯や窯場が分担していた。これらの分業が社会的に確立した。肥前磁器の製造は、2つの分業化を効率的かつ継続的な製造へと結びつけた(野上 (2017) 569)。つまり、製造技術と製造地域に分業と捉えられるが、同様の分業は他産業でも観察できる。ただ陶磁器産業は、原料調達から最終消費者への販売までを含めると裾野の広い産業であり、これらの裾野を縮小させず、維持するのが肝要である。

製造技術や製造地域に分業は、成立当初からの決定

事項ではない。つまり、社会的分業によって産地が形成されるのではなく、産地形成の基盤上、社会的分業となるものである(下平尾 (1996) 27)。小規模窯場では、単純作業から複雑な製造技術が必要な作業まで、多製造工程を同じ工人が行った。複数の窯場での地域的分業は技術的分業でも一定の生産規模と人数が必要であった。製造規模の拡大と人数増加は、胎土目積み段階から砂目積み段階への段階において顕著であった。窯場は平野に面した丘陵地に所在していたが、主な製造工程以外で必要かつ技術を要しない作業、たとえば原材料や燃料運搬などは農業従事者が担当した。これも技術的分業であり、窯焼は主な製造工程に専念できた(野上 (2017) 569-570)。肥前磁器では、農業従事者が原材料や燃料運搬に寄与した。ここではバッファ的な労働力に恵まれたことにより、肥前の陶磁器産業が支えられたことがわかる。

伊万里焼は、色絵具の発色を良好にするため、白素地の調整が必要である。佐賀県九州陶磁文化館では陶磁資料の収集・調査のため、その磁器の年代を特定する1つとして素地の色で判断している(黒田・大森・副島 (2008) 114)。有田の磁器製造は、佐賀藩の殖産政策や技術革新により急速に発展した。磁器製造における染付や色絵付は、海外だけでなく、国内でも急速に流通チャンネルを拡大させた。「諸州に数品有る中にも肥前国伊万里焼と云うを本朝第一とする」という評判は早くから定まった(日本山海名産図会伊万里市歴史民俗資料館 (1996) 1)。

1647年頃、わが国に明様式の磁器製造技術を伝え、それを輸出販売した集団について言及されることがある。その集団を率いたのは鄭氏とされる。それは吉田二号窯に色絵片の「鄭某」の記載による。鄭氏が東南アジアとわが国を結ぶ多角貿易を行うには中国製品(商品)が必要であった¹³⁾。しかし、中国の陶磁器産地であった景德鎮が清軍に占領され、供給が途絶えた。そこで長く取引があり、人的関係を有していた伊万里が新たな供給先となった。これは今日の開発輸入のようなものであった(坂井 (1998) 102)。そして伊万里焼が景德鎮の代替品として認められることになった。

1650年代から1660年代にかけて、伊万里焼の海外輸

出が本格化し、生産地として発展した。これにより製造技術的分業と地域的分業が急速に進んだ。17世紀後半の主な技術的分業化は、上絵付工程と御道具製造であった。赤江町の成立によって内山地区では上絵付業が分業された。これは製造工程の一部を窯焼から新たな業種として独立させ、専門業者化させた。大川内山の御道具山の藩窯整備も御道具を製造する人々が専門職となった。肥前の陶磁器産業地域が拡大したことにより、地域的分業化が確立した。これは海外輸出の本格化による需要の増大だけでなく、多様性の拡大のためでもあった。そして、上絵付工程と御道具製造の技術的分業も地域的分業と直接あるいは間接的な関係があった(野上(2017) 570-571)。こうして肥前における分業は、2つの側面を有しながら産地としての発展を辿ることとなった。

3 肥前磁器の海外輸出と国内流通

(1) 肥前磁器の海外輸出

1) 肥前磁器の輸出開始

肥前磁器は、佐賀藩随一の特産品となった。佐賀藩は、その特産品について伊万里津を積出港とし、陶磁器を全国へ積み出した。輸出した陶磁器は、寛永元(1624)年頃から伊万里津から長崎に送られ、オランダ東インド会社の船がヨーロッパへと輸送した¹⁴⁾。そして、元和元(1615)年から嘉永元(1848)年まで入港したオランダ船は715隻になり、この間にヨーロッパへ輸出された肥前陶器は、数百万個にのぼった(伊万里歳事記, 古賀153-154)。

わが国では、1639年に鎖国が完成し、寛永18(1641)年に平戸のオランダ商館を長崎・出島に移転した。幕府は、長崎で中国船とオランダ船のみに輸出を限定した。他方、1644年に起った明朝と清朝の内乱によって磁器輸出が途絶し、肥前磁器がヨーロッパへ輸出されることになった。輸出チャンネルは、1647年にはシャム経由でカンボジア向けの中国船で運ばれた(大橋(2011) 13)。この輸出チャンネルでは、現在でも多くの肥前磁器が発見されている¹⁵⁾。つまり、単に補給のために寄港しただけではなく、後で取り上げる鄭氏による輸出もあっただろうが、一部の積荷商品が取

引されていたようだ。

こうして景德鎮に代わり、伊万里焼が海外に輸出され始めたが、この2拠点を結びつけたのは朝鮮窯であった。朝鮮半島には、磁器の製造技術が中国から伝播し、高品質の磁器が製造されていた。また金彩を施し、色彩豊かな柿右衛門手(「手」は作風を受け継いだ製品)は、伊万里の特徴の1つとなった(浜本(2009) 314-315)。そこでヨーロッパとアジアとの交易の主役であったオランダは、供給が絶えた中国磁器に代わる製品(商品)を探し、品質が中国磁器と同等と判断した肥前磁器に白羽の矢を立てた。肥前磁器は、伊万里津から長崎出島のオランダ商館(1641年に平戸から長崎出島へ移転)を通じ、東南アジアのバタビア、アフリカの喜望峰を経て、ヨーロッパへと輸出された(伊万里市陶器商家資料館(2002a))。

1644年に明朝が滅亡すると、清朝は海禁政策をとった。そこでわが国から慶安3(1650)年にオランダ東インド会社を通じてヨーロッパへ陶磁器輸出が開始された。万治2(1659)年には大量に発注され、生産量が増大し、有田発展の要因となった(外山(2012) 27)。こうした肥前磁器のヨーロッパ輸出は、複数の偶然が重なった。

1650年代終りになると、オランダ東インド会社は伊万里の窯元に製品を製造させるようになった。当時の伊万里焼に満足し、景德鎮に代わってヨーロッパ輸出用に発注した。さらにオランダ東インド会社は、地理的にも長崎に近い有田から商品を搬出できたため、伊万里焼を多く買い付けた。こうして肥前磁器は、太平洋、インド洋、大西洋を経て、アムステルダムへと輸出された。既にオランダは、東洋貿易で莫大な富を獲得しており、ヨーロッパでは日本風色絵、柿右衛門手の赤絵が人気となった。それは当時のバロック・ロココ時代のヨーロッパの芸術風潮と合致したためであった(浜本(2009) 315)。こうして肥前磁器が海を渡り、ヨーロッパへと海上輸送されたチャンネルに思いを巡らせると、まさに陸のシルクロードに比すことのできる海のセラミックロードであった。

2) 肥前磁器に対する注目度の上昇

17世紀半ば、清朝は明朝勢力の残党で台湾に割拠した鄭成功政権の孤立化を図り、1656年には中国商船の

対外貿易を禁止した。さらに1661年には海岸沿いの住民を30里内陸へ移動させる海禁政策をとった。そのため、中国最大の陶磁器産地であった景德鎮からヨーロッパへの陶磁器輸出が途絶えた。当時、ヨーロッパの上流階級は、景德鎮のエキゾチックで神秘的な東洋に憧れ、その美術工芸品の収集熱が高まっていた（伊万里市陶器商家資料館（2020a））。こうした景德鎮の衰退により、伊万里が注目されるようになった。市場では中国磁器の輸出が激減し、わが国へもほとんど輸入されなくなった。肥前磁器はその機会に生産拡大し、国内の磁器市場を一気に独占した。これはわが国が磁器輸入国を脱する大きな転換点であった（大橋（2011）6）。

1650年代後半から1660年代にかけては、ヨーロッパへ輸出された中国磁器は極少となり、肥前磁器が中心となった。中国船による東南アジアへの輸出は、清朝に抵抗した鄭氏勢力の船が中心であった。1660年、鄭氏はオランダに代わり台湾を根拠地とし、肥前陶器をタイ、カンボジア、ラオス、インドネシアなどへ輸送した。鄭氏船が重要な役割を果たしたのは、スペインがフィリピンのマニラを東洋貿易の根拠地としており、そこに肥前磁器を輸送したからであった。スペインは江戸幕府から貿易を許可されなかったため、鄭氏船から肥前磁器を購入し、太平洋を越え、メキシコなどに輸送した。最近、キューバやスペインで肥前の染付チョコレートカップの出土例が確認され、1660年から1670年代頃にはスペイン船も肥前磁器を商品として運んだことがわかってきた（大橋（2011）8）。

3) 長崎・出島を中心とした商業活動

肥前磁器を中国磁器と同等品質の商品として販売するには、品質管理や流通チャネルの確保、市場開発も含めた総合的な商業（取引）経験が必要であった。『柿右衛門文書』には、長崎在住唐人の麴屋町「八観」（八官）が最初の色絵商品の販売に大きく関与し、商品の見立てをした可能性が指摘されている。麴屋町は、景德鎮出身の真円が開基した最初の唐寺興福寺門前近くにあった。この周辺に陶磁器を扱う唐人が集住していた可能性が指摘されている（坂井（1998）101）。この場所は、卸売業者の集積と見なすことができよう。

他方、海外の肥前磁器のうち、17世紀半ばの肥前磁器には、輸出用とそれ以外の製品（商品）があった。これらを輸送した船は中国かオランダかは特定できないが、輸出用磁器を注文し、製造させただけでなく、肥前・有田窯の国内向け磁器から適宜選定し、輸出した。寛文2（1662）年には、伊万里商人は長崎・出島に伊万里焼見世小屋設置が許可された。オランダからの注文品以外にも国内向けの磁器、すなわち見込生産品が見世小屋などで選ばれて輸出された。出島の『阿蘭陀屋敷之図』には「伊万里焼物見世小屋道具入」と記され、そこでは注文でなく、見込生産品の販売が行われていた（大橋（2011）8）。オランダによる貿易は、公式の貿易（本方荷物）のほか、商館職員やオランダ船の乗員らによる個人的売買荷物（脇荷）である私貿易もあった。当初、オランダ東インド会社は私貿易を禁止したが、わが国では許容していた。特に見世小屋での取引はこうした脇荷が主であった。また許可されたのは先の1656年の海禁令、1661年の遷界令と関係があった。さらに寛文7（1667）年に私貿易禁止令が出され、脇荷輸出も公認された（大橋（2011）13）。そして1660年代からオランダ東インド会社による有田磁器輸出が本格化し、1670～80年代に最盛期を迎えた。ただ肥前磁器（伊万里焼）がヨーロッパで持て囃された時期は短かった。1680年代後半には、清の政情が安定し、景德鎮の製造に傾注し、これがヨーロッパにも輸出されるようになり、肥前磁器を圧倒するようになった（浜本（2009）315）。

4) 肥前磁器輸出による産地への影響

肥前磁器の17世紀後半を中心としたヨーロッパへの海外輸出は、その製造に影響した。有田では窯場が再編成され、波佐見では急速に磁器産業が拡大した。これは東南アジアなど海外市場で磁器が欠乏し、東南アジア市場の需要が変化したわけではない。当時の市場が、常に磁器を求め、17世紀前半まで大量の中国磁器の東南アジア流入チャネルが政治的に遮断され、17世紀後半に肥前陶磁器がその代替となったためである。しかし、中国磁器が17世紀末に再びヨーロッパなど海外へ輸出されるようになると、すぐに中国磁器が東南アジア市場に流通するようになった。これは消費地が肥前磁器と中国磁器を比較し、後者を選択したのではな

く、肥前磁器を輸出していた唐船などが中国磁器の取り扱いに戻ったためである。肥前磁器が、中国磁器とは異なった流通形態、あるいは別の流通チャンネルで海外市場に浸透していれば、その転換期に市場での産地間競争が起こる可能性があった。しかし、肥前磁器の海外輸出は、基本的に従来の中国磁器の海外流通チャンネルをそのまま踏襲したため、その状況は消費地需要の動向ではなく、流通チャンネルの担当者に影響された(野上(2017) 573)。

つまり、中国磁器に代わり、一時期肥前磁器は、かつての中国磁器の市場であったヨーロッパ市場を席卷した。それはそれらの市場で中国磁器という商品が消失し、それに代わる商品として肥前磁器が流通したことによる。中国磁器と肥前磁器の流通チャンネルは同様であり、そこで流通する商品が代わっただけであった。そのため、再び中国磁器が流通チャンネルに乗せられると、肥前磁器は海外市場から次第に消えることになった。ここでは肥前磁器と中国磁器の製品差別化というマーケティングの初歩的な戦術ではなく、長期的には安定している流通チャンネルの中で、肥前磁器のチャンネル上の優位性を見い出せなかったことが原因であろう。したがって、肥前磁器が中国磁器との差別化戦術を採用するのではなく、かつての中国磁器の流通チャンネルを活用しながらも、独自のチャンネル政策をとる必要があった。

(2) 海外輸出の急減

1) 海外輸出急減による影響

1684年、中国磁器の輸出再開により、肥前磁器の海外輸出は頭打ちとなった。そのため国内市場での販売比重が高まり、国内市場向けの磁器製造に軸足を移した。清朝の体制が整うと再度ヨーロッパへの輸出は中国が中心となり、肥前磁器は国内市場供給へと大きく転換した。元禄期(1688~1704年)には、染締手(染付+色絵)も多くあったが、近世中後期以降は輸出時代の豪華絢爛な意匠は姿を消すことになり、白地にコバルトブルーの染付が中心になった。絵柄は和様化傾向もあったが、基本的に中国製品への意識が強く、新たな絵柄が登場する度に模造品が出回った。そして大型製品は、器の機能よりも、絵柄の表現性を優先する

製品が多くなった(外山(2012) 28)。つまり肥前磁器が、日常生活での用を足すというよりも、美術品としての機能を果たす側面が重視されるようになった。

17世紀後半、ヨーロッパで人気を博した有田焼は、中国の磁器輸出が再開されても、18世紀前半までは景德鎮磁器と併存していた。世界を相手に優れた磁器の製造は、窯の壁の廃材を利用したトンバイ塀などとして現在も有田町に残っている(大橋(2011) 13)。17世紀末以降、出島でのヨーロッパ向け陶磁器の輸出に陰りが見え始めると、伊万里商人らは国内向け陶磁器積出を本格化させた。元禄5(1692)年には、弥永太兵衛などが関西方面で商いをしている(伊万里市陶器商家資料館(2020b))。こうした伊万里商人の市場の見極めには卓越したものがあつたようだ。現在のよう海外市場情報が容易に入る時代でなかったが、小さな変化を見落とさず、流通チャンネルを大きく変化させたのは、伊万里商人や彼らから商品を仕入れていた旅商人の嗅覚が冴え渡っていたことを示している。

他方、貞享2(1685)年には、幕府による長崎貿易制限令により、脇荷輸出が拡大した。そこで幕府は、1696年に出島に脇荷専用蔵を2軒建てた。先に少し取り上げたが、脇荷はこの頃長崎で行われた交易形態の1つであった。生糸(絹)・砂糖・皮革・薬品を輸入し、銅や樟脳などを輸出した公貿易を本方荷物(本荷)と呼び、それとは別に脇荷は商館員や船長が個人的に許された貿易品であった(横山(2013) 83-84)。また中国船の増加により、1689年には唐人屋敷を設けた。ただ正徳新例(1715年)による貿易制限令により、磁器輸出は大きな影響を受けた(大橋(2011) 13)。これらは市場に適合させるための対応であったが、その盛衰は幕府の流通政策により変化した。

2) ヨーロッパ市場での肥前磁器の評価

金襴手様式は、1690年代に輸出用に製造され、染付に赤・金などが上絵付されたが、絵柄表現は伝統的な中国風とは異なり、ヨーロッパからのデザイン提示による注文生産であったようだ。フランスのセブル(Sevres)をはじめ、諸藩でコピーされるようになった。現在もイギリスのロイヤル・クラウン・ダービー社(Royal Crown Derby Porcelain Company)は、製品としてデザインしているが、現代有田焼では少数派

である（外山（2012）28）。また18世紀に入ると、アジアとヨーロッパとの交易の主役はオランダからイギリスへ代わり、さらにヨーロッパの窯芸自体が発展した。そして18世紀末には、東洋趣味に代わり、古いヨーロッパ的なもの見直しである新古典主義が起った（伊万里市陶器商家資料館（2020a））。これによりアジアの陶磁器に対するブームは完全に消失することとなった。

当時のヨーロッパ市場で取引された伊万里焼（古伊万里）は、高価格であったが、柿右衛門様式をはじめその美しさに対する需要は高く、王侯・貴族に愛好された。古伊万里を愛好した背景は、18世紀にヨーロッパで流行した複雑で装飾的な曲線で飾られたロココ調の美術や建築の風潮があったためである。色絵磁器の豪華で繊細な図柄は、その風潮に適合した（伊万里市陶器商家資料館（2002a））。またこれらを愛好した顧客層は、ごく一部の層であったが、やはり日常使用するものではなく、美術品としての側面から評価していたこともわかる。

（3）鍋島焼の形成と展開

1) 御用窯の形成

佐賀藩は1660年代に磁器の製造技法が、他に漏れないようにするため、有田から険しい地形の大川内山に藩窯を移転した（伊万里市観光協会他，1）。こうして鍋島様式は、1670年代に確立し、大川内山の佐賀藩鍋島家の御用窯で焼成されるようになった。御用窯では、藩主の愛玩品や幕府への献上品、諸大名への贈答品が製造された。特にコバルトブルーの下絵を基調として多彩な上絵具を用いた「色鍋島」が中心であり、上絵を施さない染付だけのものもあった。その中でも余白をあまりとらず、背景に青海波模様を書き込んだものが有名である。その色づかいは、古九谷の五彩や柿右衛門とも異なり、古伊万里の絵付とは明確にイメージが異なった。器形も独特であり、現在は今泉今右衛門窯の技法として知られている（外山（2012）28）。こうした鍋島は、佐賀藩が「藩窯」を組織し、幕藩体制がなくなるまで特別に誂えた焼き物を製造し続けた（伊万里市観光協会他，6）。

鍋島焼は、陶石を砕いた陶土を成形し、1,300度以

上の高温で焼いた磁器である。この製造技法では、白磁に藍色の呉須で描いた染付、染付に赤、黄、緑で絵付した色絵、深い青緑色の釉薬をかけた青磁の主に3種類があり、各々「鍋島染付」「色鍋島」「鍋島青磁」と呼ばれる。わずかではあるが、これら技法を組み合わせたものもあるようだ。鍋島の多くは、「木盃形」という独特の形の皿である。見込（皿の内側）が深く、高台が高い。大きさは直径が尺（約30cm）、7寸（約21cm）、5寸（約15cm）、3寸（約9cm）である。表の絵柄には植物など具体的事物を描いたもの、規則正しい幾何学的な文様を組み合わせたもの、山水画的なものがある。裏にも「七法結び文」や「唐草唐花文」などが描かれ、高台にも「櫛目文」などが描かれた。この他の器種では、向付や小碗、わずかながら香炉や水注、水指しなどもある。鍋島は伊万里焼（江戸時代に西肥前一带で焼かれた磁器の総称）の中でも別格であった（伊万里市教育委員会（2002）37）。

鍋島藩窯が大川内山に立地するようになったのは、延宝年間（1673～1680年）であった。そこは「秘窯の里」として入口に番所を設け、厳重に管理し、採算を考えず、高品質の特別誂えの焼き物を製造し続けた。佐賀藩は、代々一流の陶工を御細工人に登用して士分待遇とし、扶持米320石と年1,000両を与えて厚遇していた（伊万里市観光協会他，1-2）。安政7（1860）年、大川内山と日峰大明神（祭神・藩祖鍋島直茂）台石にお陶器方諸役および細工人31名、お手伝窯焼16名の刻名があり、当時の職制を知ることができる（古賀154）。さらにその家族も作業をしていた。また藩窯では、脇山（藩窯以外の窯場）に優秀な陶工がいれば、すぐに入れ替えていた。その他に役人5人と庄屋1人、大工など4人の職人がいた。現在の窯跡は、幕末期のものとしてされる。約30の焼成室からなる連房式登窯であり、全長が約137mあり、高級磁器を焼いた窯では世界最大規模である。大川内山は、延宝3（1675）年から廃藩置県（1871年）まで御用窯が置かれた¹⁶⁾。明治4（1871）年の廃藩置県で藩窯はなくなったが、伝統は現代に受け継がれている（伊万里市教育委員会（2002）36）。まさに場は奪われても技術は生き続けてきたことの典型である。

2) 藩窯の運営

近世、磁器製造が確立した分業は、地場産業の継続を支え、一方で近代以降の企業の零細化に繋がったといえる。製造工程の細分化は、各製造工程の機械化や近代化を容易にし、製造工程が専門業者化、資本が集約しにくい企業形態となった。近世の登窯は共同窯であり、複数の窯焼からなる窯場でも共通の特色や役割を共有した。近代以降、巨大化した登窯は解体されたため、各窯焼が自立して資本が分散することとなった(野上(2017) 572)。つまり磁器製造においてはさまざまなことが影響し、組織となって大規模化する道が絶たれてしまった。

大川内山の藩窯で焼成された製品は、御陶器方役所で1点ずつ厳重に検査し、僅かな瑕瑾でも発見されるとすべて打ち砕き、一片も残さずに地下へ埋められた。そのため鍋島(焼)の数はわずかであった¹⁷⁾。近世後期の大川内山絵図および最近の発掘調査では、藩窯は全長140m27室から形成され、うち3室が藩御用品専用窯、24室はお手伝窯で、お手伝窯は城内諸士用品及び一般市販品を焼成していたようだ。地下からは「伊万里」と銘のある固有の「伊万里焼」が発見されている。これは「伊万里焼とは伊万里津から積み出された肥前陶器の総称であって、固有の『伊万里焼』が存在したのではない」とされてきた肥前陶器史の説に対しては、訂正の必要があることを示唆するものとされる。その後、佐賀藩は廃藩により、楠久津・伊万里津の御番所・御船屋が廃止され、御船屋は明治期に埋め立てられ、遊里街御船山地に変身することになった(古賀154-155)。

有田や伊万里の民窯は、伊万里に集中していた陶磁器問屋・商社(伊万里商人)の傘下に置かれた。問屋や商社は、近世初期から京や大坂への流通チャンネルを有し、近代以後も有田中心の民窯は、その流通チャンネルの歴史性のため、陶磁器の伝統は継続した。民窯としては新規参入であった伊万里の陶磁器製造業者は、既存の民窯の流通チャンネルに依存しなければ、商品を流通させられなかった(大矢野(1994) 38)。つまり、新しく興った伊万里の陶磁器製造業者も、その商品の流通チャンネルは有田の窯焼が利用していた流通チャンネルに商品を載せなければ、広く全国に流通させられなかったことを意味していた。それは新規に参入

した伊万里の製造業者においても、古くからの有田の窯焼にとっても、その規模の小ささゆえ、自らのマーケティング・チャンネルを構築するのではなく、主に伊万里商人やそれらと取引をしていた旅商人ら他者が構築した流通チャンネルを活用せざるを得なかったためである。

4 伊万里商人の活動

(1) 伊万里津中心の商人活動の開始

1) 商人の原料調達に対する関与

商人のイメージには多様なものがある。そのイメージは、商人が行う商業活動により、醸成される面が強い。通常、商人というと小売商人を思い浮かべることが多い。その活動は、消費者に対して直接販売することが主活動であるため、消費者の視点からも理解しやすい。他方、卸売商人の活動は、消費者以外への販売活動が主であるため、取引している商品をはじめ、その活動は把握しにくい面がある。近世の伊万里で活躍した伊万里商人は、産地卸としての卸売商人であった。彼らは陶磁器を仕入れ、販売していただけではなく、多様な活動を行っていた。

肥前の陶磁器製造では、19世紀までに2つの制度が確立した。それは泉山の原料配分問題と窯場の製品種別制度によるものである。前者は品質、後者は品種による分業であった。17世紀半ばの内山・富山地区における品質による地域的分業は、泉山の原料配分問題が影響していた。また原料品質は製品品質に反映した。製品種別制度は、窯場の旧来の特色を生かすため、製品種類を窯場ごとに制限した。19世紀には、肥前以外にも陶磁器産地が発展したが、「旧来の特色」により有田皿山(特に外山地区)の品質向上に努め、産地内の過当競争を回避していた(野上(2017) 571)。

磁器生産の原材料や燃料調達では、先にふれたように商人が取引(仕入)に介在した。商人は、染付顔料である呉須の入手過程に介在し、商品流通だけでなく原材料や燃料など流通や製造システムに影響した。陶磁器産地では燃料確保が相対的に影響し、その製造に重要であった。寛永14(1637)年の窯場の整理統合は、山林保護が目的であった。それ以後も山林保護の

ため皿屋廃止命令が出たが、燃料の商品化で解決した。商人が燃料薪の安定供給に携わると、産地では地域の燃料薪の存在が占める割合は小さくなった。さらに有田は泉山陶石を商品化せず、地域の原料が中心となる地域的陶磁器産地を維持した。しかし、天草陶石の商品化は、産地における地域原材料の影響を弱くし、それを扱う商人との関わりが産地形成に影響した(野上(2017)574)。陶磁器焼成では、現在はガスが使用されるが、そのようなエネルギーが得られない時代は山林から燃料薪が切り出され、1回の焼成で使用される燃料薪は、一般人が想像するよりも多くの量が使用された。そのために窯周辺の山林では次々と薪用の木々が切り出され、木々の成長が追いつかなくなった。そのため遠隔地から燃料調達をしなければならなかった。これは窯焼によって調達可能な範囲を超えており、燃料薪の調達を商人に依存するようになった。

したがって、陶磁器産地では焼成のためのエネルギー供給をする段階でも商人が重要な役割を果たしていた。陶器製造では、基本的に窯焼が自前である程度の規模までは原料や材料、燃料調達ができた。しかし、磁器製造では少なくとも顔料供給は商人を介在させなければならなかった。一方、商品流通もその需要が、近隣地域や特定顧客であれば、特に商人活動の余地はなかった。しかし、遠隔地域の不特定多数の顧客を取引相手とする場合、商人の介在は不可欠となった。寛永15(1638)年の『毛吹草』「唐津今利ノ焼物」、『隔冥記』寛永16(1639)年の条「今利焼藤実染漬之香合」では、積出港の今利(伊万里)の呼称が成立し、海運で上方へもたらされた量が多かったことを伝えている(前山(1990)33)。寛永19年から20(1642-1643)年には、大坂商人塩屋与左衛門、ゑぐや次郎左衛門らとともに、先の東嶋徳左衛門が地元商人として、有田皿山の「山請(皿山の全製品を一度に引き受け販売)(伊万里市編さん委員会(2002)26)」が許可された。そのため1630~1640年代には積極的な伊万里商人の介在があった(野上(2017)213)。つまり、伊万里焼の黎明期から伊万里商人がその製造過程にも深く関わっていたといえよう。

『柿右衛門家文書』には、有田の年木山の窯焼であった喜三右衛門が赤絵付に成功し、それを長崎に持

参し、加賀藩の御用商人埒市郎兵衛に販売した記録がある。正保4(1647)年頃には、有田焼の窯焼が長崎に直接商品を持ち込んだ例がある。すべての窯焼が商品を直接長崎に持ち込んだわけではないが、伊万里商人の協力が不可欠であった。ただ一部の有力な窯焼は、長崎での流通チャンネルを有していたようだ。また同文書には、喜三右衛門が金銀焼付に成功し、明暦4(1658)年に藩主に献上し、その後有田の中ノ原町長右衛門・吉太夫が長崎へ販売に持参したことが記されている(有田町史編纂委員会(1985)551-552)。

2) 原材料供給卸としての伊万里商人の活動

寛文3(1663)年、椎ノ(の)峯(現在の伊万里市南波多町府招地域)の窯場において大火が発生した。その後、もう1つの事件の発生とともに近世唐津焼は下火となった(大矢野(1994)179)。1つの事件は、伊万里商人とのトラブルが原因であった。当時、椎の峯における窯元の大部分は伊万里商人が製造資金を融通し、完成した商品は伊万里商人が引き取っていた。しかし、元禄10(1697)年、窯元が他商人と取引をしたため、伊万里商人は大川野の代官所に出訴した。この結果、大部分の者が処払(追放・出入り禁止)となった。ここでは、当時の陶磁器取引では伊万里商人が中心であり、陶磁器需要が増大したため他商人も陶磁器製品を扱おうとしたことが推測できる(大矢野(1994)179)。それだけ陶磁器取引が魅力的であったことの裏付けでもある。

もう1つの事件は正力坊事件である。享保2(1717)年、椎の峯の陶工らが釉薬材料である白料原料を大川内正力坊で採取し、これが代官所に密告され処罰された。このことから、佐賀本藩領大川内正力坊周辺に陶磁器原料が存在したことが推測される(大矢野(1994)179)。前者の事件発生から後者の事件までは20年間のタイムラグがあるが、この間にも伊万里商人の力はより大きくなったようだ。それは伊万里商人が介在しなければ、陶磁器産地の形成・維持に支障を来したことを示している。

(2) 伊万里商人と旅商人との取引関係

陶磁器積出港としての伊万里津は、17世紀後半に形成された。その範囲は現在の市街地の半分以下の広さ

であった。伊万里津の発展は、有田町中心に製造された肥前陶磁器の積出において地の利があったこと、上方をはじめ国内各地の港と海上交通の要所にあったためである（伊万里市郷土研究会（2019）2）。

他方、伊万里津に所在した伊万里商人の家には全国各地から商人が買付（仕入）に来て、注文商品ができあがり、千石船に積んで帰るまで約半年間も滞在した。全国各地から買付に来た商人は、伊万里商人と区別する意味から「旅商人」と呼ばれる。伊万里商人は、国漢学の教養も高く、歌舞音曲に通じた文化人であり、国漢学の修得、諸芸の稽古や書画の嗜みにも努めていた。そのため後年、川久保豫章や中村鼎山など一流の学者・文人を輩出する土壌となった（伊万里市郷土研究会（2019）2）。伊万里商人がさまざまな教養を身につけようとしたのは、全国から伊万里津に来る旅商人を遇する背景があった。

『伊万里歳時記』巻二には、天保の頃（1831-1845年）、伊万里津から諸国へ総数31万俵という膨大な陶磁器が積み出された記録がある。仮に船1艘の積載が3,500俵とすると、1年間に延べ90艘の船が伊万里湾を出入したようだ。近代はじめの統計でも年間20数万俵の記録がある。伊万里津で陶磁器を扱った商人は約80軒であったため、平均すると1軒あたり3千数百俵の取扱量にのぼった。伊万里津は、俗に「千軒在所」といわれていたが、実際は周辺を含めて800軒ほどであり、陶磁器商人はその1割を占めていた（伊万里市郷土研究会（2019）2）¹⁸⁾。伊万里商人によって取引した量は異なるのはもちろんであるが、小規模な商家であってもかなりの量を取引したようだ。現在もその屋敷が残っている大規模商家では、蔵の大きさから推測してもかなりの量を取引したと考えられる。

伊万里商人は、陶磁器取引で富を蓄積し、その余裕金で海辺を干拓、田地を造成、あるいは既墾地を入手し、商人地主としての地歩を固めることとなった。その後、両替・酒造・唐物・諸国廻船・生鮮塩乾魚商などへと分流した。さらに財を成し、幕末期には壱岐捕鯨に数万両の資金を投じ（前川家文書）、佐賀藩主御座船建造費に3,000両を貸し付ける（松尾和人家文書）など、幅広い経済活動をした（古賀154）。このように商人として特定商品の取引を行いながらも、さまざま

な商業活動を手がけ、その商業活動が主体となる商人の出現は、伊万里だけではなく、多くの地域で見られた。

(3) 伊万里商人による流通金融

1) 産地継続のための伊万里商人の活動

窯焼の設備関係を整備するための借入れは、利息支払分の増加がその経営を圧迫したが、他方で生産量を増大させ、借銀返済につとめた。登窯は共同窯であり、複数の窯焼が共同で運営していた。生産量増大のために窯を新たに獲得したい窯焼は、窯の独自構築が資金的に困難であった。そこで志多勝手窯焼は生産拡大のため、伊万里商人から抵当流れの窯を借り入れた。伊万里商人の前川家では、積入人と称した窯焼に窯を貸与し、そこで製造された商品を仕入れた。ただ同家をはじめ伊万里商人は、それほど長期間窯を所有せず、後に積入人などの窯焼に売却した（山田（1995）34-35）。つまり、伊万里商人が継続して長期間製造主体となるのではなく、時機を見計らいながら窯焼に窯を譲ることが行われていた。これは製造を継続・発展させるため、言い換えれば産地継続のために金融面だけではなく、製造を直接支援する機能を果たしていたといえる。

有田窯焼は、伊万里商人などから原材料である絵薬・柞灰を調達していた。18世紀に長崎商人から絵薬を購入した有田絵薬座商人は、窯焼に絵薬を卸していたが、伊万里商人も絵薬を長崎商人や伊万里・嬉野商人から購入し、窯焼に貸与した。伊万里商人が有田絵薬座商人から絵薬を購入する一方、逆に有田絵薬商人が伊万里商人から絵薬を仕入れることもあった。当時、絵薬は中国から輸入しており、供給が制限されていたため、その備蓄・保管は伊万里商人が担っていた（前山（1990）489）。伊万里商人の前川家では、旅商人から購入した薩摩・日向・豊後産の柞灰（磁器原料である呉須など絵薬や表面の光沢を生み出す釉薬原料）を窯焼に貸与していた。こうして伊万里商人の有田窯焼への資金・原料貸与は、窯焼の設備資金・運転資金の確保に重要な役割を担った（山田（1995）35）。この時期、前川家に代表された伊万里商人は、原材料を輸入し、その貯蔵・保管をも手がけ、窯焼へ

貸与したことは、現在でいう物流的な機能を担っていたことと、貿易商社的な機能も果たしていたことになる。

2) 商人による金融支援

具体的年代は判明していないが、以前は有田窯焼が有田商人から資金を借り受けることはほぼなかったが、18世紀後半以降、窯焼の登窯運営諸経費援助のため、皿山代官所から任命された有田商人などの登心遣が、燃料代や運転資金を有田窯焼に貸与していたようである。登心遣は、窯焼に皿山代官所からの拝借銀の返済などを援助し、窯修復費や登窯運営費資金を貸与した（伊万里市史編さん委員会（2002）98）。天明8（1788）年の前川家史料には、東登の登心遣に任命された有田絵葉座商人富村家が、東登に窯を持つ窯焼に資金・絵葉を貸与したことが記されている（前山（1990）484-485）。登心遣は、担当する登窯の窯焼経営に必要な資金・原料供給に責任を有していた。こうして18世紀後半に佐賀藩の殖産政策が開始されると、陶器生産に皿山代官所・有田商人による直接的・間接的資金援助が行われ、19世紀以降に佐賀藩の流通統制政策が本格化し、窯焼層の重要な資金調達チャネルの1つとなった（山田（1995）36-37）。

特に近世半ば以降、陶磁器産業は佐賀藩の経営には必須となった。その管理・運営をした機関である皿山代官所における役割が次第に増大した。ただ窯焼への経済的支援は代官所では到底対応しきれず、陶磁器産地に所在する卸売商人である伊万里商人や有田商人の経済力に依存していた。近世を通じ、佐賀藩の陶磁器に対する流通政策は、藩財源確保のためには非常に重要であった。しかし、実際の陶磁器流通は商人が担当したため、流通政策と商人活動との軋轢が見られはじめた。

(4) 佐賀藩による流通政策（統制）の実施

1) 佐賀藩による流通政策

佐賀藩による流通政策（統制）はいくつかに区分される。享保11~12（1726~27）年頃の「一手問屋制」が、まず佐賀藩が陶磁器流通に対する第1次の統制関与であった。そして享保19（1734）年秋からの「御屋敷売制」が第2次の統制関与であった。ただ1726年以

前の4ないし6軒問屋制からそれ以後の一手問屋制への移行段階までは、佐賀藩の直接的な介入関与ではなかった。これに対し、御屋敷売制は大坂の藩屋敷がこれまでの問屋に代わった形となった（伊万里市編さん委員会（2002）64-65）。

そして御屋敷売制開始1年が経過した時点において、改変強化方針が出された。そこではそれまで手が付けられていなかった有田と大坂間の流通に踏み込んだ。有田で製造された磁器は「御上仕込」、つまり藩が直接関与し、仕入と販売を一手に統制・介入するものであった。そのため領内で陶磁器を商売する商人は、改めて願い出て、新しい鑑札を受けることになり、藩の直接的関与方針が打ち出された。佐賀藩が享保20（1735）年に初めて打ち出した御上仕込法と元文4（1739）年に具現した大坂市場支配策を一体と見なすと第3次流通統制であった（伊万里市編さん委員会（2002）65-66）。このように陶磁器流通に対しては、18世紀前半には佐賀藩による流通統制が出された。

いわゆる新仕法は、有田の陶磁器を大坂で販売することに関し、一切を阿波屋彦左衛門に委任した上でその目付役が派遣された。懸硯方は佐賀藩で年貢米など主体のいわゆる表方の財政（一般会計）に対し、小物成や特産物の販売などからの収益を備蓄する特別会計であり、平生はしばしば積極的な貸付資金として運用された（前山（1990）81）。その利子が仕込前銀として有田の窯焼らに注入された。そのため製造された製品は実質的には懸硯方が買い上げ、伊万里津で船を借り切り大坂へ集中的に送る仕組にした。他方、1739年の新仕法では、有田の窯焼は懸硯方から多額の借金をし、陶磁器製造をするようになったため、返済に追われることになった。伊万里商人には、懸硯方資金の注入により、皿山の焼物の買い切りと大坂への蔵元委託販売が実施され、大打撃となった（伊万里市編さん委員会（2002）72-74）。つまり、これまで有田商人が担っていた窯焼に対する金融主体が大きく変化しようとしたのであった。

肥前陶磁器の中心地である有田では、近世初期以来、窯焼が磁器質の染付製品、赤絵製品の染付素地を製造していた。伊万里商人は、窯焼から仕入れた染付・赤絵商品を伊万里津に仕入れにきた旅商人に販売

した。窯焼は、呉須で文様を描いた染付製品のほか、上絵を施した赤絵製品の素地となる染付製品を製造し、伊万里商人に販売した。さらに伊万里商人は、有田赤江町に集積した赤絵屋に赤絵素地への上絵付を注文し、仕上がった赤絵製品を大坂問屋や旅商人に販売した（山田（1995）31）。このように伊万里商人は、単に仕上がった製品（商品）の仕入・販売だけでなく、製造工程が切れ目なく結びつけるような機能を果たしていた。その役割が、佐賀藩による流通政策により大きく変化しつつあった。

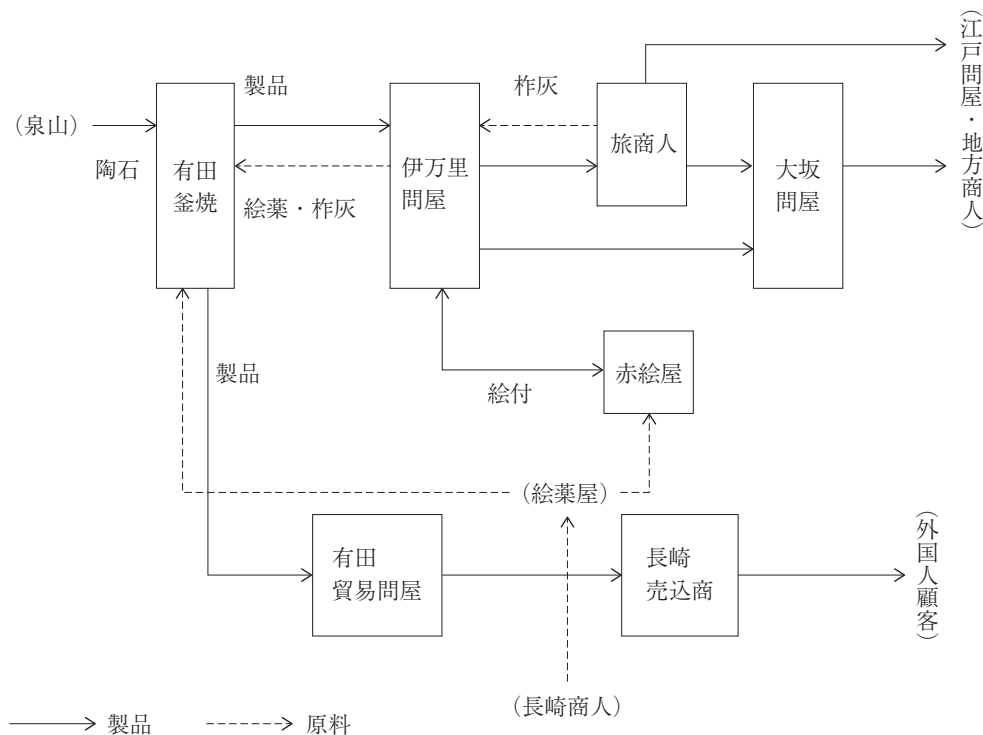
2) 佐賀藩による専売仕法導入

伊万里商人は、大坂・京都市場へは高級品から日常使いの安価なものまで幅広い商品を販売し、大坂問屋から注文を受け、売れ筋商品の情報を入手した。伊万里商人の前川家では、販売代金の回収以前に大坂問屋から為替銀を借り受け、運転資金の滞りを回避していた。同家は、大坂問屋からの商品受注と為替銀借り受け制度により、伊万里問屋は大坂市場で販売することができた（山田（1995）31-32）。図表3は、佐賀藩による流通政策である見為替（為見替）仕法導入以前（1801年）の産地構造を示している。陶磁器は、有田

窯焼から伊万里問屋、同様に有田貿易問屋を通して、江戸や地方、さらには海外へと流通していたことがわかる。こうした産地において製品（商品）を押し出す力は卸売商人によってでしかその機能を果せなかっただろう。

前項であげたように、近世において佐賀藩では陶磁器産業からの小物成が大きな財源であった（伊万里市史編さん委員会（2002）19）。その収入源を長期安定的に確保するため、現在でいうさまざまな流通政策を実施した。見為替（げんかわせ）仕法はその1つであった¹⁹⁾。見為替仕法導入以前の肥前磁器製造では、窯焼は泉山陶石を原料として素地を成形後、有田絵薬座商人などから仕入れた絵薬で下絵を施した製品（仕掛品）を伊万里商人に販売していた。それを伊万里商人が、絵素地を赤絵屋に上絵付に出し、顧客からの注文により、有田窯焼に製造・販売を伝達した。18世紀後半の有田窯焼は、自己資金だけでは製造設備の窯・作業場などの諸経費・運転資金を確保できず、商品納入先であった伊万里商人などからの借入れをし、不足分を補っていたことが背景にあった（山田（1995）34）。

図表3 見為替仕法導入前の産地構造



享和元（1801）年から始まった「専売」仕法は2つからなっていた。1つは国元における為登荷（のぼせに）体制としての見為替仕法である。もう1つは、見為替仕法を受けて大坂や江戸などでの「蔵物」荷売り体制による蔵元や問屋、仲買仕法である。これには一応の区分であり、双方は不可分、一体関係にあった（伊万里市編さん委員会（2002）133、前山（1990）173）。この状況からわかるように伊万里商人は、単に窯焼からできあがった製品（商品）を仕入れていただけではなく、素材を仕入れ、さらにそれに加工を施すための連携的役割も担っていた。また窯焼に対しては金融を行っていたことがわかる。

世紀末以降の大量生産体制は、商品を全国に流通させる流通システムに支持されていた。18世紀には佐賀藩の専売仕法や流通統制、18世紀中頃以降の旅商人による直売が産地に影響した。18世紀以降、肥前以外にも陶磁器産地は形成されたが、その多くは短期間で消失した。それは産業基盤の脆弱さと流通システムの差によるものであった（野上（2017）573）。肥前で製造された陶磁器量は多く、その流通（物流）は海運が支えた。それは伊万里港が、有田西部地区の陶磁器を玄界灘経由により、積出に最適であったためである。有田西部地区を中心とした陶磁器製造の発展は、伊万里港を積出港とし、陶磁器専門商人の活動を促した。この時期に有田で製造し、伊万里から積み出した近世の基本的物流が確立した（野上（2017）578）。

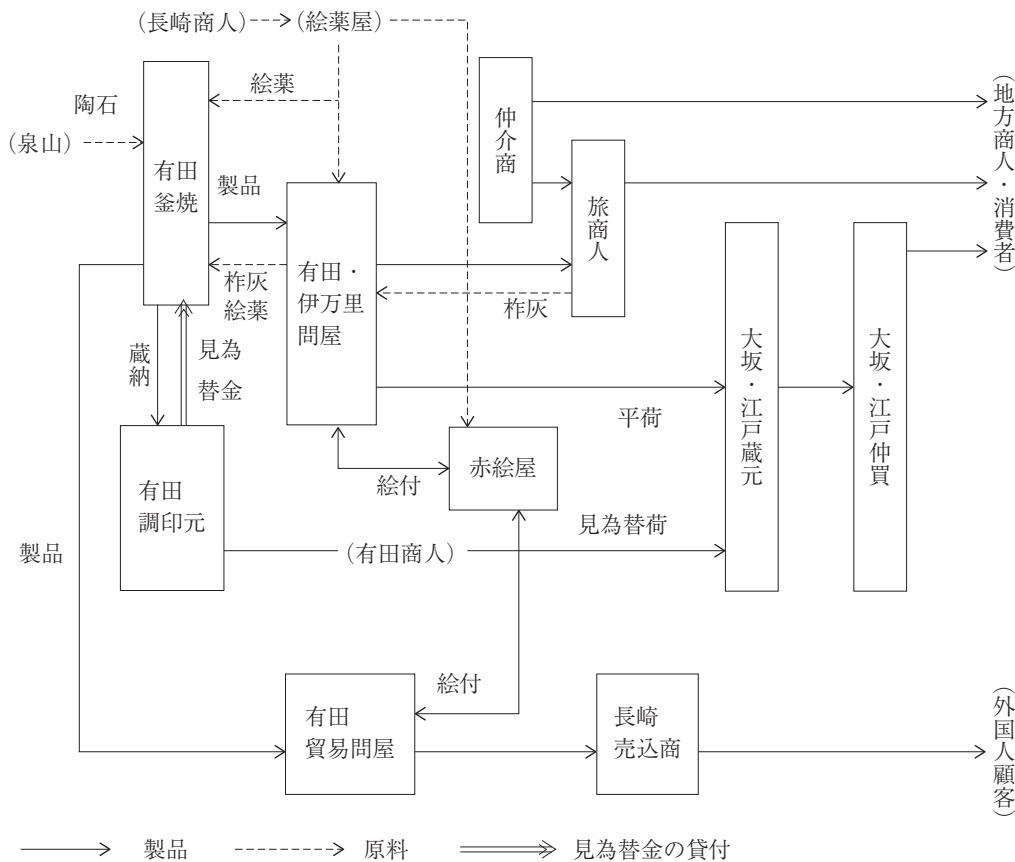
5 佐賀藩による見為替仕法導入後の伊万里商人の活動

(1) 陶磁器の積出と旅商人の活動

17世紀末以降、陶磁器流通では先にもふれたように輸出が激減し、国内市場での販売比重が高まった。17

当時、肥前陶磁器の流通システムは、肥前で大量生産が前提であった。18世紀以降、佐賀藩が専売仕法を導入し（前山（1990）114）、一方で筑前商人のような旅商人が活躍するようになった。旅商人の活動は、

図表4 見為替仕法導入後の産地構造



(出所) 山田 (1995) 37頁

筑前商人と紀州商人のそれとは異なっていた。紀州商人の本拠地であった箕嶋は、伊万里から遠く離れており、その商圏は主に江戸・関八州であった（前山（1990）646-651）。19世紀、おそらくそれ以前からも江戸・関八州は最大消費地であり、大量に持ち込んでも販売可能であった。そのため、紀州商人は一度に大量の商品を伊万里から積み出す方が効率的であった。他方、筑前商人は、本拠地が伊万里から近い玄界灘沿岸であり、伊万里に頻繁に往来し、商品を仕入れることができた。商圏は全国にまで及び、必ずしも大規模な一市場だけを対象としなかった（野上（2017）585-586）。このように旅商人と一括りにされるが、その仕入方法や運搬方法、その頻度や主に対象とする市場など旅商人が主に根拠とした地域により、大きく異なった。したがって、その旅商人の行動が異なったのも当然であろう。図表4は、見為替仕法導入後の産地構造を示している。やはり、仕法が導入された後においても、それぞれ機能は異なっていたが、多くの卸売商人が陶磁器流通には関与していたことがわかる。

（2）流通政策による流通チャンネルの変化

佐賀藩の流通政策により、大坂問屋と取引していた伊万里商人は、大坂問屋への商品販売が禁止された。ただ加嶋屋などは、佐賀藩が指定した大坂問屋へ荷物の蔵入をしていた。加嶋屋が「御手仲買」「御蔵物」の名を用いることができたのは、非公式ではあったが受容されていたためだろう（前山（1990）156、伊万里市編さん委員会（2002）118-119）。そのため伊万里商人は、荷物を送った際、大坂問屋から為替銀を貸与され、見為替仕法導入後も以前と同様に大坂向けに販売できた（山田（1995）38）。

伊万里商人の前川家は、主に筑前商人と取引をしていたが、享和期（1801～1804年）以降、石見・出雲など日本海行きの旅商人とも取引を開始し、旅商人との取引関係が若干変化した。それは取引相手の拡大によるものであった。しかし、同家の主な商品販売相手は筑前の旅商人であった。大坂・江戸で商品販売を禁じられた旅商人は、大坂・江戸以外の地方都市へ流通チャンネルを拡大する必要があった。享和期以降も旅商人の流通チャンネルは拡大し、前川家の旅商人に対する

商品販売・資金貸与は、享和から文化期（1804-1818年）はじめに増加するようになった。ただ文化期中頃から同家の旅商人への陶磁器販売額は急減し、旅商人への資金貸与（正銭取替）だけを残す状態となった。これはこの時期に販売市場が不振に陥ったことを示唆している。そのため前川家と同様、伊万里商人の松尾家は、陶磁器販売の比重を低下させ、より有利な投資として地主経営の比重を高めた。一方、天保期（1831-1845年）に地主経営を行っていた武富家は、逆に陶器販売を経営拡大させた（山田（1995）39、53）。ここでは伊万里商人の流通機能の違いが明確になった。

伊万里商人の武富家では、筑前旅商人以外に新たな流通チャンネルを開拓していた伊予桜井旅商人や下関・越後商人など新興商人との取引を開始し、陶磁器市場不況を乗り切った（伊万里市史編さん委員会（2002）436-443）。伊予旅商人は、瀬戸内海地域での商品販売を主導し、下関商人は伊万里商人から商品を仕入れ、下関まで輸送し、越後商人に中継ぎ販売をした。そして筑前など旅商人による販路開拓が不十分だった北陸東部・東北地方での陶磁器販売を展開した（山田（1995）39）。このように流通チャンネル（マーケティング・チャンネル）を変化させることにより、生き残りを図った事例もみられる。

（3）伊万里商人の先駆的活動

1) 伊万里商人の主役交代

伊万里商人が大坂方面へ平荷販売を行う中、天保期（1831～1845年）、伊万里商人の犬塚家は、大坂積に加え、江戸への平荷販売を開始した。同家は、大坂積が中心であった磁器を有田窯焼から仕入れ、江戸積開始以降、有田窯焼の商品を仕入れた伊万里商人から商品を仕入れた。同家は、江戸への平荷販売を行う伊万里商人として先駆的役割を担った。有田商人の久富太兵衛も、この時期から有田窯焼以外に伊万里商人から商品を仕入れ、大坂方面へ平荷販売を行った（前山（1990）308）。江戸方面への平荷販売開始と伊万里商人から商品を仕入れた集荷問屋の出現は、伊万里・有田商人の大坂・江戸向け販売の新しい流通チャンネルとなった。その代表的存在であった犬塚・久富両家は、その後、嘉永の見為替仕法改正時には江戸・大坂蔵元

となった（伊万里市史編さん委員会（2002）173-176）。文政期（1818～1831年）には伊万里商人の経営が悪化した。それは流通システムの変化が、その後の伊万里商人の大坂・江戸向け販売に大きな変革を要求し、天保期に大坂・江戸向け販売を中心とする産地卸が誕生したためであった（山田（1995）39-40）。

見為替仕法は、嘉永2（1849）年に改正され、その翌年、窯焼と柞灰の相対売買が禁止された。嘉永6（1853）年には有田商人の川原善之助・深川栄左衛門は、灰方請元として柞灰の一手仕入・販売を行うようになった（前山（1990）180）。灰方請元制を資金支援した佐賀藩懸硯方は、皿山代官所を通して深川家に資金を貸与した。当時柞灰は、薩摩・日向・豊後商人から伊万里商人に集められたが、柞灰の品質には差があり、佐賀藩は柞灰の品質管理を行おうとした。そこで佐賀藩は、柞灰販売をスムーズに行うため、有田皿山・塩田・伊万里の3箇所へ灰心遣を設置し、各々久富為助・米屋平兎衛・立石磯吉を任命した。この灰方請元制により、伊万里商人は仕入れた柞灰を灰方請元へ販売した。嘉永期（1848-1855年）以降の伊万里商人の武富家史料では、有田窯焼への柞灰の貸付例は確認できない。ただ灰方請元の有田商人の深川家と取引をした有田商人の河内家が、深川家から柞灰を仕入れて窯焼に貸与したように、有田商人が灰方請元から購入した柞灰を窯焼に供給する場合もあった（山田（1995）47）。したがって、19世紀になると、伊万里商人だけではなく、有田商人と呼ばれた産地卸の活動が活発化するようになった。

2) 伊万里商人の特殊な取引

有田窯焼が伊万里・有田商人から資金調達をする際には、焼物代金の前渡が運転資金の調達手段として利用された。有田商人の河内家が有田窯焼であった城嶋家へ貸金・焼物代金勘定では、同家が城嶋家に利子付で貸与し、谷登・中樽登で焼成した製品を販売する条件で資金・柞灰を前渡しし、窯上後に焼物代金と決済した。利息の付かない前渡金は、後に支払う焼物代金の前払の位置づけであった。18世紀、19世紀前半における商人の窯焼に対する事前資金・原料貸与は、同様に焼物代金の前払であった（山田（1995）47-48）。これは商品仕入を確実にするという側面と窯焼の事業を

支援した側面が強かったといえる。また磁器がすぐに製造でき、販売できるような製品（商品）ではなく、商品化まで半年前後の時間を要したことが背景にある。

18世紀には、伊万里商人は旅商人によって大坂や各地への流通量をさらに増加させ、仕入先の窯焼に資金・原料を貸与した。佐賀藩は、18世紀中頃から殖産興業政策の一環として有田窯焼に資金を貸与し、大坂市場での販売統制を試みた。19世紀には本格的な江戸・窯焼荷主に対する荷為替金融の実施や絵葉供給チャンネルの整備、皿山会所や登心遣などによる信用を利用した資金調達機会も創出した。この仕法では、伊万里商人や旅商人を排除したため、大坂・江戸向け販売が停滞した。そこで佐賀藩は、嘉永2（1849）年に有田・伊万里商人を参加させる見為替仕法に改正し、この状況を打開しようとした。つまり、天保期に伊万里・有田商人による江戸・大坂への平荷販売が活発化したため（前山（1990）177）、佐賀藩は伊万里・有田商人や旅商人の販売努力を評価し、彼らの仕法参加による見為替仕法の成功を意図した（山田（1995）48-49）。やはり、これまで陶磁器流通において大きな役割を果たしてきた伊万里商人を排除してしまうと流通システムがうまく機能しなかったといえる。

(4) 伊万里商人と旅商人との取引変化

幕末維新期に全国的な陶磁器を扱った商人は、伊万里商人の武富家-新潟陶商-多治見西浦屋のほか、新潟陶商-西浦屋-名古屋土佐屋、武富-紀州箕島福吉屋、西浦屋-箕島福吉屋、近江塚本幸助-西浦屋-名古屋土佐屋など、集散地問屋と各地の商人の取引関係があった。西国商人と新潟陶商を中心に美濃・名古屋・畿内・四国・九州・山陰・北陸・出羽を結んだ西日本、日本海沿岸の全国的な陶磁器の流通チャンネルが形成されるようになった（山形（2016）247-248）。こうした流通チャンネルの形成は、取り扱った商品の種類、さらに地理的な条件、人間関係が大きく影響した。これらにより各流通チャンネルの特徴が出るようになった。

桑名で積み出された瀬戸焼や美濃焼は、瀬戸内海を通過しながら四国へ販売され、下関などで伊万里から

搬出された有田焼と混載し、日本海海運で新潟・出羽へと販売された。ここでは全国規模による陶磁器の遠隔地間取引チャネルの成立が確認できる。おそらく兵庫、尾道小槇との取引も共通していたようだ。瀬戸内海地域の陶磁器流通は双方向性を持ち、尾道はこれらの流通チャネルにおける中継点となった（山形（2016）248-249）。したがって、時代が下るにつれて、物流環境が改善され、流通ネットワークは複雑化した。それは図表5からもわかるように、伊万里、大坂、名古屋、多治見で活躍した商人と取引をした商人が全国各地に散在していること、また特定商人だけではなく、多くの商品との流通ネットワークが形成されていたことが証明している。

幕末から明治期にかけ、有田商人の久富家や田代家などは、海外貿易を手がけるようになった。こうして近代以降、有田商人は伊万里商人から肥前磁器の流通チャネルを引き継ぐようになった。肥前磁器を扱う卸商人は、伊万里商人から有田商人へと代わり、旅商人

の地方市場への行商も有田商人に引き継がれた。それが全国の旅館や料亭への直売方式であった。有田の場合、伊万里商人の流通チャネルを応用し、近代以降の肥前磁器の流通を担った。近世の「伊万里焼」は、近代以降は「有田焼」と総称するようになった。一方、波佐見の場合、近代には一時期低迷した（波佐見焼四〇〇年祭実行委員会（1999）22）。波佐見は近代に焼成室数が減少し、明治4年（1871）の『大村藩史』（波佐見町（2000）22）に記載の焼成室数は127軒であり、幕末の『郷村記』の数値の6割程度となった。陶磁器の生産高も55%に落ち込み、窯の縮小が生産量に反映された。明治4（1871）年の『勸業課商工掛事務簿』では、波佐見の焼成室数は88とより減少した。窯の数は12登に増加したが、焼成回数は3回程度であり、肥前のほかの産地に比べると最少であった。波佐見における明治期の低迷は、製造システムの変容と幕藩体制の崩壊でその保護の喪失であったが、有田との決定的な差は背後の商人の力による差とされる（野上

図表5 近代移行期の全国的な焼物取引ネットワーク

		商人	伊万里	大坂	名古屋	多治見
			武富家	西浦屋	土佐屋	西浦屋
出羽	山形	大和屋惣右衛門	○		○	○
越後	三条	神子屋貞助	○			○
"	新潟	播磨屋勘三郎	○			○
"	"	布屋忠吉	○		○	○
"	"	亀屋十蔵	○			○
"	"	三国屋喜助	○			○
"	"	寺田屋善次郎	○			○
"	"	内藤屋権兵衛	○			○
"	"	植木屋長右衛門	○			○
"	"	伏見屋岩蔵	○			○
越中	高岡	中村吉五郎			○	○
出雲	松江	森脇屋儀兵衛	○	○		○
長州	下関	原屋清右衛門	○			○
"	"	筑前屋嘉十		○		○
"	"	虎屋安兵衛	○	○		
土佐	高知	才善屋治平	○			○
讃岐	高松	坂本屋常右衛門		○	○	○
"	"	万屋嘉助			○	○
"	"	糸屋喜助		○	○	
筑前		綿屋幸右衛門	○			○

（出所）伊万里市史編さん委員会（2002）、西浦屋多治見本店「諸国売場」、西浦屋大坂店各年「店卸勘帳」、名古屋土佐「諸国貸高下調帳」「荷物代覚」より山形（2016）248頁が作成

(2017) 574-575)。こうした産地における製造工程の変化などにも商人の影響力があつたことを示唆している。そこでは製造工程が商業過程を規定するのではなく、その逆の可能性を示唆するものである。

(5) 伊万里商人と旅商人との連携

肥前の陶磁器製造が、流通システムと密接に関係したのは、地域の製造技術と原料に立脚した地場産業ではあつたが、地域市場に立脚した産業ではなかつたためである。城下町など都市部周辺の手工業は、産地に与える外的要因は近接都市の需要であつた。一方、肥前陶磁も市場需要の影響を受けたが、主要市場が遠隔地であり、直接的影響は産地と消費地間に介在する流通システムによるものであつた。肥前陶磁が初期段階で海運に依存したのは、日本海沿岸チャンネルや瀬戸内海の内海運が発達が前提となつていた(野上(2017) 572-573)。

18世紀後半以降、伊万里商人は筑前商人など旅商人を媒介させ、全国市場に陶磁器の流通チャンネルを構築した。塩田川流域の窯業圏は、伊万里商人が持つ流通チャンネルと結びつき、流通チャンネルを拡大させた。志田地区では、瀬戸・美濃地方の磁器生産地と競合した碗類ではなく、主に皿類を製造していたため、有田の外山地区と同様、大皿の需要にも応えていた。これも商人が介在したことで消費地需要に合わせて製造できた(野上(2017) 564-565)。ここでは商人が商品差別化を主導した状況を読み取ることができる。つまり、肥前磁器が全国の市場において各陶磁器産地の商品が同レベルで競争に晒されることを回避させようとしたことである。

伊万里商人が仕入れた志田地区の商品は、伊万里津へと運搬し、同様に伊万里津に運搬された有田外山地区の商品と筑前商人など旅商人が積み出した(前山(1990) 587-588)。19世紀前半の志田焼は全国の遺跡で出土し、19世紀前半に産地として急成長したことがわかる(前山(1990) 601)。その急成長を伊万里商人が促進した。ただ伊万里商人自身が全国に流通チャンネルを拡大させたわけではない。直接担当したのは旅商人であつた。志田焼は伊万里商人が持つ旅商人の流通チャンネルと結びついた(野上(2017) 563-564)。ただ

全国に流通チャンネルを拡大し、張り巡らせたのは旅商人であつたとしても、それら旅商人が機能するように差配したのは伊万里商人であつた。それはこの時期における陶磁器流通のチャンネルリーダーは産地卸としての伊万里商人であつた。

おわりに

本稿では、肥前地域において近世初期から隆盛した陶磁器産業、中でも磁器産業に焦点を当てた。まず、豊臣秀吉の朝鮮出兵に帯同した肥前地域の為政者が、朝鮮人陶工を連れ帰り、陶磁器製造を開始したところを起点とした。そして、有田泉山での陶石発見により、磁器製造が開始された。それが中国景德鎮からのヨーロッパへの磁器輸出が途絶えたため、伊万里焼に白羽の矢が立った。ヨーロッパへの海外輸出が低調となった後も、市場を国内へと視点を向けることにより、産地の製造活動維持と流通チャンネルの維持において、産地卸商人としての伊万里商人の存在がクローズアップされた。

伊万里商人の活動がまずクローズアップされたのは、磁器原料調達についてである。製造工程が分化していく中、有田泉山から天草地域で産出された陶石へと次第に転換していった。そこで陶石原料として窯焼に安定的に原材料を供給した伊万里商人は、磁器製造において、生産量を安定化させる機能を果たした。他方、「酒井田柿右衛門=赤絵」という図式は、絵の具の材料を取引していた東島徳左衛門が初代柿右衛門へ伝えたことが明らかとなっている。つまり、新規の材料供給だけではなく、技術伝達においても現在から見ると大きな役割を果たしていたことがわかる。さらに陶磁器製造(窯焼)には膨大な量の薪を使用した。これを近隣から調達していた段階から、調達先を遠隔地に求め、継続的に供給し続けた卸売商人の役割が大きかつたといえる。

そして伊万里商人は、製造工程が分化する中、それぞれの製造工程を結節し、その関係を長期間継続するものへと発展させた。また、完成した商品を国内各地に所在した旅商人に卸し、彼らが全国津々浦々まで流通させた。こうした旅商人との関係性を長期間維持さ

せるには、市況や流通政策の変化などやはり大きな苦勞があったが、そこにおいては商人による金融機能が提供された。こうした金融機能は、製造段階にも提供され、その継続に大きな役割を果たした。

肥前磁器は佐賀藩の大きな税収源であったことから、藩による流通政策が実施された後も、規制を前提に自らの活動を柔軟に組成し直すという面も観察することができる。そして、流通政策がたびたび変更になる中、卸売業者としての商人が自らの機能を柔軟に変化させたことは、産地における産業継続と地域貢献の側面からも観察できる。また市場変化にも柔軟に対応し、製造工程を保守しただけでなく、原材料など供給業者の地位も保全してきた。

本稿では、伊万里商人における個別商人の行動について紙幅の関係から詳しく取り上げなかったが、各商家で代々受け継がれてきた目に見えないノウハウ、さらにファミリービジネスとしての継続性、そして販売先であった旅商人の行動、またそこで培われてきたノウハウなどについては稿を改めたい。

注

- 1) 筆者には祖母が茶碗や湯飲みを「せともの」「からつ」と呼んでいた記憶がある。おそらく祖母はきちんとした区別ができていなかったと思われる。しかし現在も単に陶磁器に対して同様に呼んでいるのは、その産地ブランドの影響が大きいためである。また筆者は愛媛県で育ったため、おそらく当時使用していた茶碗や湯飲み、急須などは、瀬戸物でも唐津物でもなく、「砥部焼」であったと思われる。また砥部焼の伝統はもともと肥前から愛媛県砥部へと伝えられたと大川内山の堀に記されている。
- 2) 古伊万里は、17世紀後期から18世紀前期につくられ、色絵に金彩を加えた金襴手を中心である。大皿や壺が多く、金彩が目につくため、調度品として収集されていた。また18世紀中期以降のものはほとんどない。一方、幕末から明治前期のものがある。伊万里焼は欧米で人気を集めた後、再び中国製に市場を奪われ、19世紀後期に復活した（『日本経済新聞』2019.1.14）。
- 3) 田代窯は、松浦系古唐津の中でも叩き黒唐津德利、川原諸窯は織部風絵唐津、松文大皿、奥高麗茶碗など時代を先取りした陶器焼を行った。また岸岳崩れ以降、唐津藩内の陶器焼成の中心的役割を果たした（伊万里市史編さん委員会編（2007）574-576）。古唐津は、粘土を成形し約1,300度の高温で焼いた陶器である。唐津焼は桃山時代から江戸時代に西肥前一帯で焼かれた陶器である。近現代の「唐津焼」と区別するため「古唐津」ともいう。市内には桃山時代から江戸時代末期にかけ、「古唐津」を焼いた古窯跡が波多津町や南波多町、大川町、松浦町、大川内町に約80ヵ所ある。これは一市町村では最多である。「一楽二萩三唐津」と呼ばれ名声の高い古唐津は、市内の窯跡調査が進んでいない（伊万里市教育委員会（2002）39）。
- 4) 波佐見町は、北隣に有田、伊万里、唐津に続くわが国有数の陶磁器産地である。400年前余、豊臣秀吉の朝鮮出兵でわが国に渡った陶工が住み着いたのがこの一帯であった。波佐見があまり知られていないのは、交通・流通網の発達が遅れたためである。また江戸時代の「お国事情」もあった。石高35万石の佐賀藩に所在した有田に対して、波佐見は3万石に満たない大村藩であり、経済力で劣るため高級食器より、地味な日用食器の生産が重視され、注目されなかった（『日本経済新聞』2007.6.27）。
- 5) 古九谷は17世紀後半、加賀藩の支藩大聖寺藩でつくられ、数十年も経ずに消えた陶磁器である。器全体を緑や黄に塗り、大胆な構図で松竹梅や花、動物などを描いた青手と呼ばれる図柄のほか色絵（祥瑞手、五彩手）がある。九州陶磁文化館の大橋康二学芸課長（当時）は、1991年に青手、色絵とも有田でつくられたとする古九谷＝有田説を発表した。有田地区の詳細な窯跡調査の結果を踏まえており、現在ではこの説が有力視されている。「古九谷様式」といういい方も増えている（『日本経済新聞』1996.10.13）。
- 6) 石川県山中町九谷町の江戸前期の屋敷跡を発掘調査していた石川県埋蔵文化財センターは、1999年7月1日、年代、造成の規模、構造などから屋敷跡は磁器を作った工房とみられ、九谷においても磁器が一貫して生産された可能性が高いと発表した。九谷焼の起源、「古九谷」は、同様の色絵を持つ伊万里焼とする「古九谷＝伊万里説」が定着している。屋敷跡からは1998年1月、九谷古窯で焼かれた色絵磁器片が出土し、周辺から色絵窯があった可能性を示す焼土も発見され、九谷でも古九谷様式の色絵磁器がつくられていたことを示す状況証拠となりそうだ。そして、「古九谷＝伊万里論争」は、石川県小松市や寺井町で製造されている色絵磁器、九谷焼の起源をめぐる論争である。古九谷は江戸時代前期の明暦元年（1655年）頃から約40年間つくられたとされ、深い緑や黄色など鮮やかな色彩が特徴である。1991年に東洋陶磁学会が「古九谷の大半は初期伊万里」との見解を示して以降、佐賀県の伊万里をルーツとする説が定着したが、加賀・大聖寺

- 藩が石川県山中町の九谷古窯で焼成したとの言い伝えもあり、石川県の関係者は「九谷起源説」を唱えている（『日本経済新聞』1999.7.2）。
- 7) 1700年の椎の峯事件に関係し、多くの陶工が処分されて百姓となり、椎の峯の陶器生産は縮小しながらも継続したが、唐津坊主町御用窯への移転で次第に衰退した。唐津藩内の陶器生産は、当初から佐賀県伊万里商人と関係が深く、椎の峯事件の頃には既に古伊万里の流通を押さえ実力を備えた伊万里商人と力の関係が逆転し、衰退に拍車がかかった（伊万里市史編さん委員会編（2007）574-576）。
- 8) 初代柿右衛門は1640年代から1660年にかけて、鮮やかな赤絵付けなどの技法を確立した。花鳥をはじめ自然の題材を赤や黄といった暖かみのある色彩で描き、非対称で余白豊かな構図が柿右衛門様式の特徴であり代々受け継がれてきた（『日本経済新聞』2016.4.12）。
- 9) 14世紀元の時代、染付（呉須顔料を用い素地の上に文様を描き、その上に釉薬をかけて焼くと青色に変化、そのままの場合は黒く発色）が始まり、青磁に代わって染付が普及した。わが国には景德鎮用の染付が高級磁器として輸入されていた（黒田・大森・副島（2008）114）。また有田は、磁器生産に不可欠な陶石鉾床の発見と生産手法の開発で和様磁器の主要産地となった。産地発展とともに佐賀藩からの統制も強化され、分業の上に閉鎖的な生産・販売体制が確立された（山田（2013）224）。
- 10) 伊万里焼の影響からヨーロッパ各国で磁器研究がされ、18世紀初頭に白磁製造に成功し、工業化されたのがドイツのマイセンであった。明治以降は世界各国での万国博覧会に出品され、装飾性の高い飾り皿や大鉢などはヨーロッパでも人気を博した（『日経 MJ』2012.2.20）。
- 11) 柿右衛門様式は18世紀以来長く廃れていたが、昭和28（1953）年に第12代・第13代柿右衛門が再現された。戦前有名になった珊瑚色の赤（いわゆる柿文の赤）はここでの朱とは異なるものである（外山（2012）28）。
- 12) 唐津焼は1580年代後半に始まったというのが定説である。朝鮮陶工により最初の唐津焼がつくられた。当時の「古唐津」の窯跡は、唐津市内にはほとんどない。初期の唐津焼は現在の相知町や北波多村周辺、その後は武雄市や伊万里市、有田町などで焼かれていた。それが「唐津焼」と呼ばれるようになったのは、唐津の港から船で出荷されたためである。有田では一時期、同じ窯で陶器の「唐津焼」と磁器の「伊万里焼」が同時に焼かれていた（『日本経済新聞』2004.11.13）。
- 13) 台湾の英雄鄭成功（1624-62年）は海賊・商人であった。九州陶磁文化館の大橋康二学芸課長（当時）は、台湾で発見された陶片を鑑定し、宣明の銘だけでなく、文様の表現法を見ても99%以上肥前とした。これにより、台湾が肥前陶磁の東南アジア輸出の拠点を示す物的証拠となった。鄭は、中国人の父鄭芝竜、田川姓を持つ日本人を母とし、九州・平戸に生まれた。芝竜は中国・福建の出身でアジアの海を舞台に活躍した海賊の頭目であった。彼は1630年頃までに対立した海賊をほぼ鎮圧し、中国から東南アジア一帯の海を支配した。成功が中国大陸に渡ったのはその頃で6歳であった。芝竜は後に明王朝に帰順した（大橋・坂井（1994））。成功は明復興に尽くし明王朝の姓「朱」をもらい、「国姓爺（皇帝の姓を持った人の意）」と呼ばれた。しかし、明復興に固執した成功と形勢不利と見た芝竜の間で距離ができた。結局、芝竜は清に内通した。芝竜の海上勢力を引き継いだ成功は1650年、中国アモイを本拠とし、日本と東南アジア各地との貿易活動を開始した。成功軍は、15万とも18万ともいわれた兵士を擁した。それに要する経費は莫大で「両」に換算して年間400万両が必要であった。その6割以上が貿易で賄われた。そのため中国製陶磁器の供給停止は欠損を意味した。肥前陶磁輸出はそれを補った。清朝は成功の経済活動を封じ込めるため、1656年に海禁令、1661年に遷界令を出した。海禁令は成功との取引禁止が目的であり、遷界令は成功を支援した福建沿岸部の住民を強制的に内陸部に移住、沿岸部の無人化が目的であった。中国大陸に足場を失った成功は、オランダが占拠していた台湾を新たな拠点とするため、戦いを挑んでオランダ人を追い払った（『日本経済新聞』1996.10.20）。
- 14) 有田焼産業の基盤を固めた契機が輸出であった。17世紀半ば、オランダの東インド会社による買い付けが本格化した。伊万里港で船積みされたため「伊万里焼」と呼ばれた。輸出は一度、途絶えたが、1867年のパリ万国博覧会に出品するなど再度力を入れた（『日本経済新聞』2016.4.12）。
- 15) 輸出第1号は、オランダ東インド会社の日誌には1648年1月に長崎からカンボジアに向かう中国船が磁器を積んでいたことを確認したとしている。しかし、いつ長崎を出港したかは不明で、これが論争の契機となった。1998年9月に現地調査した菊池誠一・昭和女子大講師（ベトナム考古学）は、墓碑銘から首長は1647年10月に死亡、1650年2月に埋葬されたとした。ムオン族には生前の愛用品を副葬する風習があり、発掘当時の地層調査でも埋葬後に掘り返された跡はないため、茶碗は1647年10月以前には伝わっていたとみた。菊池は貿易風を利用する当時の航海技法から船は1647年9月頃、長崎を出てベトナムに寄港したようで茶碗は輸出第1号の可能性が強いとした。一方、伊万里焼研究の第一人者で佐賀県庁職員大橋康二（当時）は、これまでの研究に基づき、茶碗の文様

は1655年以降の生産に限って使われたもので、考古学的に矛盾する。発掘の際に別の副葬品と取り違えたのではないかとした（『日本経済新聞』1999.2.14）。

- 16) 現在の太田内山には、30数軒の窯元が軒を連ね、その伝統、技法を現在の伊万里焼に受け継いでいる（伊万里鍋島焼会館パンフレット）。
- 17) 鍋島は幕府や大名、皇室や公家などへの献上用や贈答用の他、佐賀藩の城中用に用いられた。そのため佐賀藩は威信をかけ最高品質の焼き物をつくった。鍋島は延宝年間（1673-1680年）頃から廃藩置県までの約200年間、厳しい藩の管理下で年間5千個ほどがつくり続けられた。世界に誇れる優れた作品が多いのは、採算を考えない鍋島藩窯（藩直営の窯）であったためである（伊万里市教育委員会（2002）37）。
- 18) 天保3（1833）年には陶器商の鑑札を有する者は93人いたが、80軒ということは既に減少し始めていたともいえる（前山（1990）369-370）。
- 19) 見為替仕法は、享和3（1803）年に大坂の新問屋により「見為替仕法」という有田焼専売制度が実施された。これはそれまでの方法では利益が上がらず、皿山は疲弊するだけという有田皿山の願いで始まったとされ、窯焼保護には中間介在をできる限り排除することが有効とされた（有田民俗資料館（2007）2、伊万里市史編さん委員会（2002）97）。

参考文献

- 有田町史編纂委員会（1985）『有田町史 陶業編Ⅰ・Ⅱ』有田町
- 有田町史編纂委員会（1988）『有田町史 商業編Ⅱ』有田町
- 有田民俗資料館（2007）「新発見の皿山代官日記」『皿山』No.73, 2-3頁
- 伊万里市観光協会ほか「旅 伊万里」パンフレット, 1-23頁
- 伊万里市教育委員会（2002）『伊万里市の文化財—ふるさとの風土と歴史を知る宝物—』伊万里市教育委員会
- 伊万里市郷土研究会（2019）『明治維新150年記念 幕末・明治と伊万里の人』伊万里市教育委員会
- 伊万里市史編さん委員会（2002）『伊万里市史（陶磁器編古伊万里）』伊万里市
- 伊万里市史編さん委員会編（2007）『伊万里市史（近代・近世編）』伊万里市
- 伊万里市歴史民俗資料館（1996）『伊万里の陶器商人』伊万里市歴史民俗資料館
- 伊万里市陶器商家資料館（2020a）「セラミックロード～古伊万里のヨーロッパ向け輸出から」『白壁』No.1
- 伊万里市陶器商家資料館（2020b）「江戸時代の日本を豊かにした伊万里商人」『白壁』伊万里市陶器商家資料館だより, No.3
- 大橋康二（1984）「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館, 152-169頁
- 大橋康二監修（2011）『海を渡った古伊万里セラミックロード』青幻舎
- 大橋康二・坂井隆（1994）『アジアの海と伊万里』新人物往来社
- 大矢野栄次（1994）『古伊万里と社会』同文館出版
- 黒田尚美・大森由希子・副島れい子（2008）「佐賀県の色絵磁器について—伊万里焼における素地の色 白の美学—」『日本色彩学会誌』第32巻, 114-115頁
- 古賀稔康「概説伊万里史—中世から現代への歩み—」153-159頁
- 坂井隆（1998）『「伊万里」からアジアが見える—海の陶磁路と日本—』講談社選書メチエ
- 下平尾勲（1996）『地場産業—地域から見た戦後日本経済分析—』新評論
- 外山徹（2012）「伝統工芸有田焼の商品開発動向—歴史的視点から第2次大戦後・現代まで—」『明治大学博物館研究報告』第17号, 27-36頁
- 日経 MJ「伊万里焼—磁器の魅力、欧州に渡る（地域ブランド AtoZ）」2012/02/20, 5面
- 日本経済新聞「アジアの海を渡った古伊万里（中）ジャワの王国興亡伝え（美の故郷）」1996.10.13, 20面
- 日本経済新聞「アジアの海を渡った古伊万里（下）明復興の軍資金かせぐ（美の故郷）」1996.10.20, 16面
- 日本経済新聞「ベトナムで発見の茶わん、輸出第1号？伊万里焼論争—肯定派、1647年には到着」1999.2.14, 西部社会面17面
- 日本経済新聞「（古九谷）石川県で生産か、江戸前期の屋敷跡は工房—伊万里説の反証材料に」1999.7.2, 38面
- 日本経済新聞「唐津焼—朝鮮から陶工、16世紀発祥」2004.11.13, 地方経済面西部特集34面
- 日本経済新聞「長崎・波佐見、隠れた陶郷素朴の輝き、町並み彩る陶板、廃工場で交流も」2007.6.27, 夕刊19面
- 日本経済新聞「有田焼の挑戦（上）輸出で成長、原点回帰—400年の節目、官民で開拓（陶都再興）」2016.4.12, 地方経済面九州13面
- 日本経済新聞「ウィーンに散る古伊万里—古城に所蔵された江戸の陶片、チームを発足し復元」2019.1.14, 28面
- 野上建紀（2017）『伊万里焼の生産流通史—近世肥前磁器にお

- ける考古学的研究』中央公論美術出版
- 野上建紀（2018）「新刊紹介 野上建紀著『伊万里焼の生産流通史—近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術出版，2017」『多文化社会研究』長崎大学，Vol4，425-427頁
- 波佐見焼400年祭実行委員会（1999）『波佐見焼400年の歩み』
- 浜本隆志（2009）「マイセン磁器と食文化—景德鎮・伊万里・マイセナー」『海の回廊と文化の出会い：アジア・世界をつなぐ』313-332頁
- 前山博（1990）『伊万里焼流通史の研究』
- 山形万里子（2013）「近代移行期の陶磁器流通—全国的流通網の成立—」『創立五十周年記念論文集』（1），211-255頁
- 山田幸三（2013）「伝統産地の変貌と企業家活動—有田焼と信楽焼の陶磁器産地の事例を中心として—」『上智経済論集』第58巻，第1・2号，219-235頁
- 山田雄久（1995）「徳川後期における肥前陶磁器業の展開—佐賀藩領有田の事例を中心として—」『社会経済史学』第61巻第1号，社会経済史学会，30-56頁
- 横山伊徳（2013）『開国前夜の世界』吉川弘文館